伊澤文書　一

H20
446

區叶藏書

伊澤家系圖

柏軒翁家傳ヲ根源トシ群書類従及武田信玄事蹟等ニ依リ訂正ス

大正五年一月二日　信忠　謹記

義光
伊豫守頼義ノ三男号新羅三郎 刑部大輔 大治二年十月二十日卒行年七十三歳 法名先光院殿

義清
武田王郎 甲斐守 久安五年七月二十三日卒行年七十五歳 法名正覺院殿

清光
伊豆守 逸見本ト号 仁安三年七月八日卒 法名清光院殿

信義
武田太郎 駿河守 文治二年三月九日卒行年五十九歳

信光
伊沢五郎ト号 伊豆守 法名光蓮 承久三年十月朔日卒

信政
伊豫守 武田小五郎ト号ス 法名眠阿弥陀仏

信時
五郎次郎 伊豫守 法名昊信院殿

時綱
六郎 伊豫守 法名声阿

信家
伊豆守 改信直

東京帝國大學圖書之印
B 23475
000432811 8

信武 孫六 陸奥守 延文四年七月十三日卒 法名清浄具院雪山昭公
信成 次郎 刑部大輔 明徳五年六月十三日卒 法名継統院殿
信春 陸奥守 應永二十年十月二十三日卒 法名護國院殿
信満 次郎 安藝守 應永二十四年三月六日卒 法名長杉寺殿
信重 三郎 刑部大輔 宝徳二年十一月二十四日卒 法名成親院殿
信守 弥三郎 刑部少輔 享徳四年五月十一日卒 法名能浄寺殿
信昌 五郎 従五位下 刑部少輔 永正二年九月十六日卒 行年五十九 法名永昌院殿
信縄 五郎 従四位下 左京大夫 永正四年二月十四日卒 法名長興院殿
信虎 童名五郎 従四位下 左京大夫 天正二年三月二十五日卒 法名大泉寺殿 行年八十一歳
晴信 信濃守 大膳大夫 天正元年四月十二日卒 行年五十三歳 法名法性院殿徳栄軒機山信玄
信繁 左馬助 永禄四年九月十日河中島討死 行年三十七歳 法名宗闇院殿
信綱 六郎 刑部丞 上野介 天正十年三月於甲州鮎川戦死 法号逍遥軒海天

信賢 兵庫頭 天正三年五月二十一日於三州長篠戰死
信俊 甲州河窪ヲ領之 依テ武田ヲ改メ河窪ヲ姓トス 河窪新十郎 文左衛門 寛永十六年二月十四日卒
信雄 主膳正 越前守 従五位下 寛永十六年三月二十五日卒 行年三十九歳 法名玄英
信忠 信雄二男 忠五郎 三 母山田十太夫重封女 寛永六年七歳而奉謁家光公 賜父領地内
正重 吉兵衛 慶長十二年三月三日卒 行年六十四歳
正信 従五位下 隼人正 寛文十年十二月二日卒 行年七十六歳
正岸 主水正 延宝二年六月十六日卒 行年五十四歳
正次 権右衛門 元禄二年四月三日卒
有信 宗家初代 徳兵衛 享保十八年十月十八日卒 行年五十三歳
信政 二代 良椿 天明四年十月七日卒 行年七十三歳
信栄 三代 下冨衛 明和五年八月二十八日卒
信階 四代 分家初代 長安 隆升軒 文化四年五月二十六日卒 行年六十四歳

代	名	事項
五代	信美	邦仙軒字文誠　文政二年四月二十二日卒
六代	信全	桃醉軒　文久二年閏八月十八日卒　行年八十二[?]歳
七代	信崇	巖松院道盛　明治二十九年一月十三日卒　行年五十七歳
八代	信平	
分家二代	信恬	辞安蘭軒　文政十二年三月十七日卒　行年五十三歳
分家三代	信厚	長安榛軒　嘉永五年十一月十六日卒　行年四十九歳
分家四代	信淳	春安棠軒　明治八年十二月十六日卒　行年四十二歳
分家五代	信忠	徳　日精軒
又分家初代	信道	磐安柏軒　文久三年七月十九日卒　行年五十四歳
又分家二代	磐	好醉軒　明治三十七年十一月二十四日卒
又分家三代	信治	

信二三十七年ハ三十八年ノ誤リ[?]

宗家初代

歴世略傳

初代有信、通称徳兵衛、父流芳院春應道田居士（元禄四年辛未五月十八日、二十二歳）。天和元年月日不詳生、享保十八年癸丑十月十八日死。五十三歳。墓ハ東京市麻布区笄町長谷寺。法号好信軒[?]一道田了居士。妻貞壽院瓊林晃珠禅尼。（イ妙輪院清芳光桂大姉、乳母）児浄智禅童子。（イ有信弟青声軒孤峰異白居士俗称長左衛門）

事續　伊沢美作守善腹の子に、常ニ正世嫉妬心強きなれバ危害あらんこと[?]を乳母（法名妙輪院清芳光桂大姉）日夜憂苦の餘り、抱負して長谷寺ニ逃げ込ミ（其時の住職ハ已の叔父ニ）

養斎は後年深川に於て伊沢屋徳兵衛を称し質商を営み日増隆盛其附近の地を購求す後世是地を伊沢町と称す（永代橋より福島橋を渡り右河岸に曲りし坂田橋に至れる前の河岸及中通り伊沢町と云ふ）其頃桑長右衛門所行不正遊興費に窮し再三謀書謀判の所業あり其都度弁償せらる是故に遂に我家屋敷を売却し更に今の麻布鳥居坂の地を購求し移転せらるゝと口碑に傳ふ（往年摩堂石紀年の頃正宗君より聞知の次第記録す）

二代信政、通称良樁、天明四年甲辰十月七日死（法名記録七十五）七十三歳、

法号幽林院岱翁良樁居士。 養父有信、好信軒。 養母貞壽院 実父遠州小野田八左衛門。 大青柏樹居士 実母嫩相壽桂大姉 妻大久保氏（伊佐子又貞光）。壽山院湖月貞耀大姉。父大久保元萬。称主水。法名好生軒寶蓉遠宿居士。母華開院休蓉光蓮大姉（信政長男玉顔梅香禅童子、二男浚月良潭禅童子） 児信宗 金十郎 曽能子

遺墨 瀏覽慶中七十年。寛濡板上月晴天。欣求不遠西方土。乗得因前般若船、

三代信榮。明和五年戊子八月二十八日。法名万昌軒久山常栄居士 父信政幽林軒 母大久保氏壽山院 妻合智氏

宗家四代
分家初代

児信美 称仙野△ 錦吉 (亻 △徳山信美佐士、妻合光院安室自恩大姉)

四代 分家初代 信階(シナ) 字太升 号隆升軒 通称長安 初名剛次郎、後元安 養父二代 信政 号 幽林軒 養母大久保氏喜山院 生父井出権蔵。江州郷士(亻越谷)。四時軒自性如春居士(亻如春自性) 生母善室英證大姉 妻伊沢氏。幽林軒信政女 曽能子。快楽院是参貞如大姉 児 信悟 蘭軒。安佐子 幾緒子(終身黒田家に奉仕す。正宗院湛然禅定尼。八十一歳)(亻信階妾 箱崎 室女) 文化四年丁卯五月二十八日死。六十四歳。墓、東京市麻布区笄町長谷寺先塋の側 法名隆升軒興安信階居士

奉職 寛政六年甲寅十月二十八日備中守阿部正精公侍医 (亻太和 正倫之)

学歴 武子龍子に学ぶ(飯田休庵家照軒同門)

逸事 宗家三代下曽軒死没嫡実子信美弱年の故を以て一時養代家督第四世と成り下年に至るを待ちて信美に宗家を譲る是宗家第五世なり位は今の東京市本郷区真砂町櫻木天神社附近に別居して更に分家す是我家祖先也

遺墨 季春奉陪石原別館

別館春遊日。庭園倚釣磯。鳥過林裡轉。花拂槛前飛。草萋添風静。細流浮月微。遊随深花興。戀意似忘帰。

分家二代

追而遺言　日常孝経を愛読す是に依り手鈔せし長男信恬に与ふ後世之を例とし男子出生すれば十才より一部手鈔して与ふ毎年正月元旦早朝諷誦初として朗読するを我家の例と定む

蘭軒略傳　後輩高弟森立之記
不肖孫伊沢盤補
不肖曽孫伊沢信平補

名。字。及号

分家二代　信恬（サダ）初力信。字憺甫（一字君恬）素問上古天真論中より出づ時の藩主正精公自筆にて恬憺虚無真気従之精神内守病安従来　又嘉齋。蘭齋。都梁、笑僊（人性磊落にして常に大声に笑語す其声郷中に響く）遠近姑射山人等の数号あり

保古茶話 八景の詩 記

通称　辞安

堂号　酌源堂（先年帝国図書館中根粛治氏記録清阮元編経籍纂詁十三元の部文選典引　斟酌道徳之淵源）

三養堂（頼山陽門弟同藩関藤成章自筆題字文中安分以養福寛胃以養気省費以養財）

書室号　芳櫻書院（常に芳野櫻を愛す吉野郡主吉野より苗木を自邸に移植す后年に至り大さ三四抱に成る菅茶山芳櫻絶句の自筆保存ある）

保之く内日見松の三字二欠伝日見して大日付松茶りしあえん

父長安(初玄安)。信満。字太升。号隆升軒。母伊沢氏(二代幽林軒信政の女、快楽院是誉貞如大姉。妻飯田氏(岡藩侍医飯田休庵(休庵信方二女照軒)二女和楽院潤壌貞道大姉。児信屋(字朴甫、榛軒と号す)家を継ぎ、藩信ま仕へ、侍医と成り、后幕府出目見格と成る)。常三郎(幼死)(華岳春晃居士)。信道(初信重。字任甫。柏軒と号す。別に一家を成す。藩信子仕へ、後幕府の侍医及法眼と成る)。女子三人(マツ王第智顔童女)(一安嫁井上応卿卯順也。)長子天評子、順子(花影禅童女)。

安永六年丁酉十一月十一日生江戸(本郷真砂町桜木天神附近の住宅)。生る。復文化十二年乙亥七月二十二日出座

歿拜借移轉す今の東京市本郷区西片町十番地なり)。文政十二年己丑三月十七日歿。五十三歳。葬東京市麻布区……十九日(三……瀧ぶ(医学衰襲情の(全)。程赤城胡兆新等と周交す 醫小目黒道琢竹田長安院叔安等本草学小赤萩由儀、太田長元等に学ふ多紀桂山應酬す但し藝をもって子(雷軒道命し乙二子長

(イ留氏杏安眷子休甫退身、次某為眷子、其死後当氏為眷子)

(イ馨庵烈童子　妾腹良吉
俗良童女
覚心禅童女　妾腹マチ
究竟院妙寧日理大姉
天質寿昌信女　信恬妻姉
(信方長女、母奥居水戸氏、夫金陸軒留田杏安寅土方臣里澤退蔵子)

保云く御目見格の三字の誤。御目見して大目付格となし。格とありえん

父長安（初玄安）。信階。字太升。号蓬升軒。母伊沢氏（二代幽林軒信政の女、快楽院是冬貞如大姉。妻飯田氏（岡藩侍医飯田休庵（休庵信方、紅照軒）二女、和楽院潤壌貞道大姉。児信厚（字朴甫、榛軒と号す。家を継ぎ藩侯ニ仕へ侍医と成り后幕府の目見格と成る）。常三郎（幼死）（イ 岸岳春昇居士）。信道（初信重。字任甫。柏軒と号す。別に一家を成す。藩侯ニ仕へ幕府の侍医及法眼と成る）。女子三人（長子、天津子、順子）（一女嫁井上応助、即順也）（イ マツ王学習顔童女方）（イ 花影禅童女）

安永六年丁酉十一月十一日生江戸（本郷真砂町櫻木天神附近の住宅ニ生ル）。後文化十二年乙亥七月二十二日広座敷拝借移轉す（今の東京市本郷区西片町十番地なり）。文政十二年己丑三月十七日死。五十三歳。墓ハ東京市麻布区笄町長谷寺。法号芸擾軒自安信恬居士。

【奉職】備中守阿部正精公の侍医

【学歴】幼年、榊原忠公ニ従ふ。又文化三年丙寅五月十九日（三十歳）長崎奉行榊原主計頭ニ随従し期年長崎ニ遊ぶ（医学衰観慣懺の余り）。経赤城州兆新等と風交す。医ハ目黒道琢竹田長安院叔安等。本草学ハ赤萩由儀、太田長元等ニ学ぶ。多紀桂山應酬ニ但し藝をとくす（蘭軒遺命して二子長

任云 市野迷庵、迷庵 定斎？

任云 箋注の誤

人（名光弟）亀田鵬斎、狩谷棭斎、市野迷庵、小島成斎等あり
就中屋山は同藩の故を以て親交厚く詩賦唱和常に絶へ
ず又棭斎は同学の友なるを以て其交膠漆も啻ならず棭斎
著す所の和名鈔の箋注を著す際其病名及び本草に関す
る箋注は多く蘭軒に諮詢せしと云ふ、後棭斎の姪安、蘭軒
の姪子磐安に嫁す又頼山陽は父の交を以て江戸に来り
蘭軒の家に寄寓し宋版病源候論補正の事を執れり
逸事及逸話　蘭軒長崎より帰り直ちに藩の侍医となる
後年足痛を患ひ遂に痿躄となる因て直に表医の列を免かれり

任云、小林玄瑞、吉田図書、楊庵

安磐安、弟子道純、養竹、昌栄、直蹟、安清、宗綏、道秀の徒弟を多
紀楽亭江蘆庭の石町自家に於て傷寒論諸書を主とし去
小蘆庭も門人の列に加へ、更に二十七の夜会を設けし友
人接客の情状を示すもの（はまき）　儒学は亀井豊洲に学ぶ（俗称斉
吉野、名光蓮、字伯盈、号樵文組
太郎、旧幕府の先手与力本郷森川町に住す文化己巳六年
墓碑集覧作吉
五月七日没五十二歳墓誌草永住町新光明寺に在り木村
定良、狩谷棭斎、植村士明、權山底孫等皆此門より出づ
友人　多紀柳沜（桂山長子、蘆庭の兄、医学館々主）辻元崧庵（俗
称為春）、頼春水（山陽の父）、弟杏坪、菅茶山、太田南畝（蜀山

儒官を兼め君侯（阿部備中守正精棕軒と号す）の編選序跋
筆作文に至りては一篇毎に刪正を命ずる拝謁の節にいたりての
侍して君前に伺候する蘭軒短視（常て外出帰途夜に入り
隆慶橋を通過の際後より小僧手に燈剌を提て翁の身
辺に来り仰視し且嘲りて云ふ太公かく赤き丈夫や翁深夜
に向ふ如く急ぎ帰れと云再三顧みしを交へて云ふ翁泰
然自若として前言を陳し小僧も遂に形を消す従者大に
驚き遁走す後に偶ら来て翁に前の有り形を具に云ふ翁
近視の為めえに不明大に笑ひしと云ふ事あり是に差出

むちかたゝあふみこゝに

猶の可笑ならんか）且褌を帯びざるの一癖あり其時君前
にて茎垂を露せしことあり依て君侯新に膝襯を製せし
め一回之を用ひし後蘭軒之を賜はりし筆は君主の威権を
辛て蘭軒[illegible]を支視するものといふべし總て特例出格の扱
を蒙り恩寵優渥なりし蘭軒常に世医の文弱に流れ気概に
乏しきを恥ひ且医家の我を筆ね其生前に朋友たる子[illegible]同藩の
亜伯村片桐題に嘱し甲冑を着し十徳を帯びる肖像を画
かしめ又医の学術を論ずるに至ては和漢古今を論ぜず
其経験実試を主として見聞を廣ふす其書に於けるは素

問、霊枢、難経を始めとして傷寒、金匱より千金、外台、医心方等後世の儒門事親、玉機微義、證治要訣、瘟疫論に至るまで皆採摭して日用に供す尤寒熱虚実を分明にして主方するを要とす其要方の選着何れをも揺かし全備せず総て大意要妙を要得せし人にして其人に随てその一から教示を異にす偏に一見を立るの徒と日を同ふして論ずべからず清國の戴東原に比すべきところなり其瑣細の小義に渉らねども其大義に確乎として動かず其門下に人物ある所以なり故に惺庭先生毒て論説せられ

十

備云 昌意ハ昌庵ノ疑

なり

【門人】小山良哉　清川玄道（名愷字吾人号藹𡑮旧聞藩）　森養竹（立之号枳園明治十八年十二月六日没）　木村昌硯　中丸昌意　下条玄修　山内東眠　渋江道純　山田昌栄（業広旧高崎藩）　塩田楊庵（初小林玄瑞）　手塚良元（初酒井安清）　小野道秀（旧弘前藩）　天野道周　有馬宗緩　和多田玄順　山上規矩庵　杉山寿庵　横田宗禎　数泰庵（旧福山藩）　岡西玄禎（同藩）　其他不明

【著書】（数多あれども脈稿に至るまで著多し）　蘭軒遺稿　蘭

軒医談　蘭軒詩集　蘭軒文集　蕓窓随筆　長崎紀行
居家遠志　蕓窗要方　春山路

[遺墨]

病中示二兒
富貴功名不一謀。只要兒輩讀書覧。能教文種長無絶。
即是我家好子孫（茶山刪正の作表装）

孝經（文化乙丑小春廿四日據毛本鈔矣）　醫範（九章千金
方中より撮要し我家の医範とす）

右蘭軒略傳一部　帝國圖書館依嘱ニ應シ謹寫シ
納む

大正四年四月八日

分家三代

榛軒略傳

[名、字、及号] 分家三代 信厚。字朴甫。号榛軒。（急就篇。顔師古注。榛。
厚朴也。） 推枕軒（元人詩中ニ人間万事塞翁馬推枕軒中
聽雨眠）

[通称] 一安（幼名棠助始良安後長安） [堂号] 酌源堂　三養堂

（幻光禅童女　レン
幻心禅童子　鐵三郎
疎桐禅童子　義子）

和樂院
福山町字
人 利子（幼
禅童女）

軒医談　蘭軒詩集　蘭軒文集　甚齋随筆　長崎紀行
居家遠志　甚齋要方　春山路（ハルノヤマヂ）

【遺墨】　病中示二児

富貴功名不一論。只要児輩読書裳。能教文種長無絶。
即是我家好子孫。（茶山刪正の儘表装）

孝経（文化乙丑小春廿四日揺毛筆（鈔矣））　便吾　医範（九章千金
方中より撮写し我家の医範とす）

右蘭軒略伝一部　帝国図書館依嘱に応じ謹写す
納む

大正四年四月八日

伊沢家三代

榛軒略伝

【名字及号】伊沢家三代　信厚。字朴甫。号榛軒。（急就篇。顔師古注。榛。厚朴也。）　推枕軒（元人詩中ニ人間万事塞翁馬推枕軒中聴雨眠）

【通称】一安（幼名棠助始良安後長安）　【堂号】酌源堂　三養堂
（堂名起因蘭軒略伝中ニ詳記ス）

父辞安信恬　字憺甫　号蘭軒　長男　母飯田氏和楽院

妻飯田氏浄楽院妙蓮貞信大姉（墓廣島県深安郡神辺町字東町賢忠寺小棠軒墓側ニ在リ）　女子　柏子（示幻禅童女）　又ノ人　利子（幼

ニして死す）　文化元年甲子八月二十五日生江戸　嘉
永五年壬子十一月十六日死　四十九歳　墓東京市麻布
区笄町長谷寺先塋の側　法号推枕軒安々信厚居士
奉職　文政四年七月二十八日備中守阿部正精公侍医及
正寧公正弘公に歴仕す　天保十四年癸卯医学館講師拜
命　弘化四年丁未十一月幕府御目見拜命
学歴　医学は厳父及多紀茝庭辻本崧庵田村元雄等　儒
学は狩谷棭斎、杉崎コードー（本字不明）等に
友人　森養竹　木村金平　清川玄道愷　山田昌栄　渋江

道純　塩田楊庵　手塚良元　岡西玄禎　成田良元　有
馬宗綏　小島成斎　小島春安
逸事及逸話　榛軒は常に藩君の為めに医事に尽し支
らんことを日夜心掛け（た）幕府侍医の内命ありしも累世藩君の
恩顧且領民施術[illegible]の如くあらざることに依り固辞すに依て御
目見格と成る
森養竹、石川貞白、三沢玄間故ありて失禄後藩君に帰藩の
上陳奏す（其他友人子弟中にて困難あれば直に訪問して物
貴を寄與して困窮の労をとる　常に仁愛深く毎月本郷

伊勢利店より鰻魚又は團子坂也廣所より雀等購求し放
生す　又常に蓮花を愛するに依て器具も是に類似する物
其諸家庭用等合て一千個以上とある
先父君遺愛の櫻樹其花期中諸子を招集し觀櫻の小宴を
催す其時飯田安石終日田樂焼く約一ケ月間　又常に
義を重し漢朝關羽皇朝飛梅菅公肥後清正公の三傑を
私尊し毎朝礼拝す　又子弟中酒癖ある者は禁止せん
が爲め自ら代て禁酒す後子弟之を歎き先生當て嗜好の
酒を吾爲めにせられしを悔し直に戒をすて子孝之目

熱心なるを推して知るべし
嘗て藻居（正寧公）に随従し福山へ行く其際市中蒲焼の
商の声を聞き従者に命じ金二朱を出し購求す従者等き
何の為め大に購求するやと聞く翁自ら食すると答ふ然るに
購求し来る見れば豈圖哉鰻魚に非らずして田螺の蒲焼を大
皿に盛り出すに翁呆れ口保ち失敗談あり
門弟　森隆仙（塾頭福岡）　黒川雲飲（桐家）　清川安策（菜園）
同玄策　柴田崇庵（幕府）　柴田修徳（太田邊）　三好春令
柴田方庵　手塚良運　自石村文貞（土屋）　山口安文　一関宮

保云恒善
保云昌平ハ畳遊ノ誤
亢碩ハ玄碩ノ誤

良通　須川隆伯　宗安隆　栗原玄順　島村周庵　木村
容菴（川越）　石川甫淳（棚倉）　竹内玄賓（津山）　坂上玄丈
沢玄徳（九鬼藩）　古志祐安（上野）　田村玄理（慕府）　渋江
道隆　井口常春　岡村春碩　森適斎　渡辺恩室　矢
島亢碩　高井元養　服部辰次（以下秋山藩）　太宰喜安
鼓蘭安　三好純安　前田安貞　皆川順庵　岡西玄庵
笹山道仙　飯田安石　石川自白　森養真（明治四年六
月三十日没）　豊田有喜

著書（不著述）　榛軒詩存（其他不明）

十六

遺墨

示良安
医家総古在千奥。千古而来若之人。万巻読書看
破去。心知回腑妙微機神。（其他詩を好むもの）二十二軸
自筆ある

柏軒略傳

又分家初代

名字及号　又分家初代信適（初信重）字道甫又任甫　号柏軒。
昌陽扁記　文信（傳震川文粋中）（一作王陽明文粋）　在適軒（同）　好徳軒（本経逸）
屢中（同）　尚経軒（同）　天心居士　博大軒　十安（医事小言跋）
学思斎（難経経釈跋）　通称盤安（幼名鉄三郎。後好安）（名経作中政安）

十五

任之氏 生年月日は如くし 記しまし

堂号　明誠堂　尊德性堂　求經堂（明誠堂名録）　留心医薬堂

父　諱安信　字愷甫　号蘭軒　三男　母飯田氏（園藩侍医飯田休庵次女）　和樂院淵壤貞温大姉　妻狩谷氏（狩谷棭齋次女　初名高子　後俊子　和漢學ニ秀ヅ　今清少納言ト世人云ふ　清樂院貞烈大姉　四十八歳没　児　棠助　磐（幼名鉄三郎）　信平（幼名平助）　孫助　洲子　國子　安子　琴子

文化七年庚午正月十九日生江戸　文久三年癸亥七月十九日死（同年正月二十日依上洛供奉中京都滞留地ニ於テ病没す）　五十四歳　墓　京都市高倉通東入ル二寺任寺　東京市麻布区笄町長谷寺先塋の側　法号　文行院忠信居士

又　正大軒志道居士（一作高士）

奉職　安政三年丙辰備中守阿部正精ノ侍医　安政四年丁巳十月十五日幕府御目見　安政六年己未八月二十二日幕府侍医拜命　万延元年庚申十二月十六日法眼ニ叙ス　文久三年癸亥正月二十日将軍上洛供奉ヲ命ゼラル

学歴　厳父及多紀茝庭。辻本崧庵ニ就キ狩谷棭齋等ニ学ぶ

友人　棒軒先翁の友人ト同じ

【逸事逸話】学事熱心食事中給仕の際手を空しくするは
いう身辺に児童玩具用ひし談又草紙筆等の外に何に依
らず披見す平素片時も空しく費すことを厭ふ又書法は楷
書を好む手簡及記録等總て楷書を用ゆ

平常は天照皇大神宮を崇拝す自邸には白木の棚に神燈五
六個並列す別に神符等は一切置かず是は我赤心神意に
通ずるを良とす

或日雷雨劇烈中医学館出講の際廊下を通過す其側に在
る塀の外に落雷あり一時絶命す他に負傷ありしも全く

天祐あり

別に一家を起す其際日本橋浴屋町に仮寓し後年幕府
任命の借地は玉池に移住す

【著書】不明

【遺墨】文久三年癸亥七月病中在臥書す之は国学者
を主とする者忠孝に基くことを余る時は先来一言する事也
読め又孝経論語を読誦せよ是は其上書を余る時の
事也
　其餘今の俗に随ひ七々日月忌年忌に僧を請
仏典を読むは不要也
　又曰忌日を終る時に孝経を

一、佗子論語易田屋ゟ書を峯ニんと申ニ候へハ内経素問 佗
子内経霊枢 佗子難経 中七経
右三ハ通ぜ佗子随て諸儒諸仏経典ハ大過あるべからず
但所好ハ善悶ふ是ハ書平生可知 千巻の経書を読誦する
も生前より方ハ事の耳ニ属之
善悶ふの佗ハ仏祖の経之

一医 文行院忠信居士

一医の文ハ医経又ハ本草等を学習通知するを云
医の行ハ右の文を以て病を療治するを云

分家四代

と云ひ右の文行二つとも忠信なくしてハあらざるを

正大軒志道居士

門弟 松田道夫 塩田良貞 志村京叔 平川良宗 清川玄安
栄（以下福山藩）岡西養玄（後子岡寛斎）成田元章
爾来文礼 内田養三（其他不明）

小棠軒路傍

名字及号 分家四代 信淳 字良甫 号棠軒 公斎軒 常軒
通称 幼名鐵造 後信順 淳良 良安（春安）
堂号（棠軒）酌源堂 三養堂 廿三庵

養父一安信淳字朴甫　養母飯田氏浄樂院　生父田
中淳貞信庵（因州鳥取藩池田侯侍医）信庵院清誉淳居
士）　生母杉田氏（幕府侍医杉田元伯女八百子、常壽院
杉若智貞大姉）　妻伊沢氏（信淳長女柳子、後、摩樂院之
号、又寛能子と改む）今般即位大典の際八十一歳高齢
ニ達し天盃并市役所より麹面等拜受の光栄ニ浴
兒　信淳（幼名常助後辛安）　紋次郎（幼死）　三郎（同）　末雄
同　長子（同藩医津山碧山ニ嫁す）　良子（宇都宮二代伊沢
磐ニ嫁す）　信子（幼死）　幸子（同）

天保五年甲午四月十四日生江戸　明治八年乙亥之十一
月十六日死ス、四十二歳　墓。廣島縣備後深安郡福山町字東
町賢忠寺ニ在り　法号小常軒春安信淳居士
奉職　嘉永六年癸丑正月伊勢守阿部正弘公侍医　正教公正
下公正桓公ニ歴仕す　文久二年壬戌三月福山詰拜命（即
時東都引拂移住）　文久三年癸亥誠之館医学講師拜命
学歴　柏軒、森養竹、山田昌栄、清川玄道、関藤成章等ニ学
ぶ
友人　石川貞白、森養真　三好東安　吉田洞谷　上原全

八郎　飯田安石　岡寛齋　馬屋原玄益　豊田春玄　河
村イヽク（本字不明）　其他不明
逸事及逸話　正教公は大患君命に依り長途つひやしにて上京
拝謁詰切石州澶田戦に出張　正守公は大患中上京拝
謁詰切（明治三年庚午正月二十三日）　正桓公は入國以前
約百日関藤成章等と共に近親の名にて廣島表出張滞留会は
入國に陪供奉入城す　明治元年戊辰役函館出陣す凱旋
帰國に陪蔵迎す　巌父容貌出運前に太子異なり結髪及洋
服着用顔面日に焦け巌父を見違へ処に尋ねて居漸く家

大人なることを知り大に笑ひ且つ驚きたり　廃藩の際
藩君上京せらる吾医道日増衰退洋医は之に交代し日に隆
盛巌父も大に思慮し累世名家を養ふの身として傷つけ
んことを憂苦の[redacted]餘り断然廃業し風月及詩歌書見を友
とす時に小舟にて投網或は垂釣を楽しみ殆んど隠居に
の趣あり
門弟　藤田松軒　成田玄高　矢守敬美　小林庸二　大原
為吉　小林仲次郎　平野富三郎　上原鉄三郎　吉田直
三沢栄　村上登之人　飯田尚

遺墨

示平安（函館出陣前自筆

數百精兵護錦旗。順風解纜到天涯。分襟今日去

・係遺歴記上小冊子中之詩。

大正四年三月二十三日

不肖男

信忠日慕軒謹記

先霊名録

華岳春晃居士　朔日

芳櫻軒第二子名常三郎

文政十二年己丑二月

馨烈童子　二日

芳櫻軒妾腹之男也名良吉母佐藤氏

墓在本郷栄福寺

文化十五年戊寅正月

究竟室妙等大姉　芳櫻軒第三女井戸応助妻文化

十一年甲戌四月八日生終時年四十三

歳葬于芝中正運寺

安政三年丙辰二月

大音柏樹居士　四日　遠江人　幽林軒本生父也　小野田
八左衛門　墓在遠州豊田郡
太田村　真福寺
延享元年甲子五月

天質壽昌大姉　飯田休斎長女　杏庵妻　和楽院姉
天保九年戊戌閏四月

和楽院貞温大姉　五日　芳櫻軒配　飯田休庵第二女　母
水識氏　田信厚柏軒母　終時年
四十七
文政十二年己丑二月

華開院休譽光蓮大姉　六日　好生軒配　壽山院母
安永八年己亥九月六日終　墓
在浅草誓願寺

夏屋涼清信女
水識氏寂照軒後妻　和楽院母　天
明八年戊申五月六日終　墓在西窪
青竜寺

幽林軒良椿居士　七日　第二代　名信政　好信軒養子　遠江
小野田八左衛門子
天明四年甲辰十月七日終　七十五

八日

好生軒貫誉恵密居士　大久保玄水元苗寿山院父也　宝暦九年己卯三月八日終　墓在浅草誓願寺

智貞童子　芳桜軒第二女　生七日許終　文化九年壬申四月八日

十日

全隆軒一道鐵關居士　飯田杏庵信□　寂照軒養子　伊勢薦野里澤退蔵子　文化十三年丙子六月十日卒　墓在青龍寺　一作十一日似是

智遊童女　隆升軒末女　名阿安佐　安永八年己亥十

一月卒

覺心禪童女　芳桜軒妾腹女子也　名阿万知　母佐藤氏　文政十一年戊子十一月終

十一日

四時軒如春居士　號谷井出権蔵　隆升軒本生父也　天明四年甲辰正月十一日終

寂照軒勇機鍊心居士　圓侍医飯田休庵信方　和樂院父　文化九年壬申七月十一日終　墓在西窪青龍寺

十三日

善窓英證大姉　四時軒妻　隆升軒本生母也　明和五年戊子五月十三日終

正宗院妙總禪尼 陞升軒女芳櫻軒之同胞姊也
嘉永四年辛亥十二月十三日終葬于禪雲寺中靈泉院

推枕軒安々信厚居士 十六日
文化元年甲子八月二十五日生
嘉永五年壬子十一月十六日卒 四十九歲

貞照院古泉妙潤大姉 十七日 貞壽院姉壽山院恩人也 延享四年丁卯九月十七日終 墓在長善寺

芳櫻軒自安高士 辯安信恬遺命以十八日葬

疎桐禪童子 信厚義子實信室子母藤田氏天保六年乙未閏七月十七日殁

好信軒道圓高士 十八日 元祖德兵衛有信 享保十八年癸丑十二月終 一作十月十八日

貞壽院瓊叟林禪尼 好信軒之後妻也 延享二年乙丑正月終

快樂院貞如大姉 二十二日 名曾能 陞升軒之妻 幽林軒之女 万升軒之妹 芳櫻軒之母 文化三年丙寅十二月二十二日終 遺命以二十八日葬 五十七

稱仙軒徳山居士 名信昊字文誠万昌軒之子快樂院之兄隆升軒之養子為宗家第五代母谷智氏

文政二年己卯四月廿二日終

二十五日

花影禪童女 名阿順 芳梅軒妾腹之女母佐藤氏

文政六年癸未三月殁

一作安政三年丙辰二月二日年四十三究竟

室二々見于上

二十八日

壽山宮湖月貞禪大姉 名伊佐 法名貞光幽林軒之妻大久保主水元苗法名好生軒之女

万昌軒快樂院之母享和三年癸亥七月二十八日終遺命以十八日祭

万昌軒久山常榮居士

八十四

幽林軒長子宗家第三代快樂宮之兄母大久保氏明和五年戊子八月二十八日終 名信榮

快樂宮貞如大姉 隆升軒之配幽林軒之女万昌軒之妹芳梅軒正宗院之母

隆升軒興安居士 名昌寄信階幽林軒之養子第四代

文化三年丙寅十一月二十二日遺命以二十八日祭

傳家於猶子稱仙軒仕于福山家以芳梅軒為後

嫩桐壽桂大姉
文化四年丁卯五月二十八日卒 六十四
幽林（信敬）軒之母也 宝暦九年己卯五月生
〇 小野田八左衛門

追加
亨声軒孤峰冥白居士
朔日
大久保主人卜嶋相氏母 一作先代卜腰宮 居ノ母
吉田与兵衛女
花向院 古満久伯娘

外祖父 寂照軒勇機鐵心居士 休庵
文化九年壬申七月十二日卒
適配 心浄智観信女
明和七庚寅天七月初三日卒
井出氏 權藏女 大升妹
外祖母 纒室夏座涼清信女 民女
天明八年戊申五月六日卒
水城氏
従父 金陵軒一透徹関居士 杏庵
文化十三年丙子六月十二日卒
外祖父養子 實薦野家中里澤氏男

従母 天質壽昌信女
天保九年戊戌閏四月四日卒 年六十五
寂照軒嫡女 知樂孺人女兄
右弘化四年丁未秋七月十二日拝 青竜寺之
墓洒水供葉記之
右恐柏軒所記

貞松院古泉妙澗大姉 九月十七日
壽七十五歳 紋梅鉢 越前家安田長安
文照院御臺様一位 天榮院ニ仕フ
大久保妻死スルユヱ 壽山院五歳ヨリ養育
貞壽院叔母様
高祖 伊達家中
三好助右衛門跡ヲ立
元ハ目黒ノ農夫
右恐柏軒所記

旗本伊澤家譜抄

幕之紋 三ツ菅笠

家之紋 蔦

替紋 掴子木

正重 吉兵衛 天文十年生 慶長十二年死

正信 深右衛門 吉兵衛 隼人正 文禄四年生 寛文十年死

正岸 元和七年ノ生 延宝二年死

正次 深之丞 權右衛門 元禄三年死 有信八歳ノ時死ス

正久 有信ノ異母兄二十四年ノ后有信生ル 吉兵衛 播磨守 万治二年生 寛保元年死 八十三歳

政周 織部 主水 享保七年死

方貞 吉兵衛 享保元年生 明和七年死

政則　吉兵衛　部屋住　明和四年死
政繁　助次郎
方守　吉五郎　内記　明和四年死
彝宜
正貞
政武
方教　岩五郎
正記　忠三郎

備忘録

下谷区金杉村百三十番地

北総稲湖畔
柳江漁長
大槻文彦

○
石禾字孝　録存異文。
隆升軒。始名元安。後名長安。
宗軒。後順信。後良安又春安。
其他ゝ歴世略伝同。
狩谷望之。初名真末。字卿雲。号棭斎。又蟫翁。
求古楼。青裳堂。
通称三右衛門。初名賢次郎。

生父高橋与惣次。名高敏。号黍雨。
生母佐藤氏。武州葛飾郡小松川村医師女。
妻狩谷氏。蓮法院。
児悰之。字少卿。通称三平。大覚院。
緑。圓瑩院。
孝。太加。清樂院。
生安永四乙未年於下谷仲町。
卒天保六乙未年閏七月四日。六十一歳。
墓下谷北清嶋町功徳山天竜寺。
法名常関院實事求是居士。

先祖書

清和源姓

家之紋　三笹竹笹　蔦　拍子木

一　清和天皇七代新羅三郎義光ヨリ出伊沢悪太郎信忠後胤伊沢辞安信恬二男

一　先祖　生国武蔵　伊沢長安信階

寛政六己寅年九月廿日雁之間席阿部備中守手医師ニ罷成文化四丁卯年五月廿八日病死仕候

伊沢長安信階伜

一　二代目　生国武蔵　伊沢辞安信恬

雁之間席阿部備中守医師之節文政十二己丑年三月十七日

病死仕候

伊澤辞安信恬次男
伊澤磐安法眼信道

一 初代 生国武蔵

温恭院様御代安政四丁巳年十月九日於医学館久々講書仕
医業を出精仕候ニ付御序之節御目見被仰付候旨於躑躅之
間久世大和守殿被仰渡同月十五日於御納戸構御薬献上仕
初而御目見仕候 当御代安政六己未年八月廿二日新規被
召出高三十人扶持被下置奥詰被仰付候旨於御祐筆部屋
縁頬御老中御列座松平和泉守殿被仰渡同七庚申年二
月廿一日奥御医師被仰付勤候内二百俵高ニ成下御薬料
并之通被下置候旨於土圭之間御老中御列座安藤対馬守
殿被仰渡同年十二月十六日法眼被仰付候旨於奥久世大和守殿
被仰渡文久三癸亥年正月廿日御上洛之節供被仰付候旨於
御膳建御老中御列座水野和泉守殿被仰渡白銀二十枚
拝領仕同年二月十三日御上洛御供ニ而上京仕候所病氣
ニ付還御御供不仕京地ニ而養生罷在候處追々疲労相増八
月廿九日病死仕候
右之通御座候以上

文久三亥年十一月

伊澤徳安

親類書

伊澤徳安

高三十人扶持 本国甲斐 生国武蔵
伊澤徳安
実年二十三

三十

當御代私父伊沢磐安法眼奥御醫師之節文久三癸亥年二月御上洛御供ニ而上京仕候處病氣ニ付還御之御供不仕京地ニ而養生罷在候處病氣差重ニ付跡式奉願置八月廿九日病死仕候同年十一月父磐安跡式無相違下置候旨於菊之間老中列座牧野備前守殿被仰渡小普請組安藤与十郎支配罷成去寅年八月本多寛司支配之節小普請組支配ゟ廣止候事奉行支配被成候

親類書

父方

一 祖父

帝鑑之間席
阿部伊予守醫師之節

私曾祖父伊沢長安死 次男

伊沢辞安 死

一 祖母

柳之間席
中川修理大夫醫師之節

私祖父伊沢辞安死 次男

飯田休庵 死 娘 死

一 父

奥御醫師之節

伊沢磐安法眼 死

慎徳院様御代嘉永五壬子年十月七日於醫学館信恬町醫師罷出候者共講書可仕旨被仰付温恭院様御代安政四丁巳年十月九日於醫学館久々講書仕醫業も出精仕候付御序之節御目見被仰付候旨於躑躅之間久世大和守殿被仰渡同月十五日於御納戸構御菓献上仕初而御目見仕候當代安政六己未年八月廿二日新規ニ被召出高三十人扶持被下置奥詰ニ被仰付候旨於御右筆部屋御縁頬老中列座松平和泉守殿被仰渡同七庚申年二月廿二日奥御醫師被仰付勤候内二百俵高ニ被成下御番料並通ニ被下置候旨於土

圭之間ニ而老中列座安藤対馬守殿被仰渡同年十二月十六
日法眼ニ被仰付候ニ付於奥久世大和守殿被仰渡文久三亥年
正月廿日ゟ上洛御供被仰付候ニ付於御膳立老中列
座水野和泉守殿被仰渡白銀三十枚拝領仕同年
二月十三日ゟ上洛御供ニ而上京仕候処安房守ニ付還御
ゟ御供不仕京地ニ而養生罷在候処其後疾労相増八月
廿九日病死仕候

一母　武州崎松川町住居
　　右　佐藤玄秀　死娘　死
　　愛伊賀守醫吉郎　死次男
　　伊賀守平助

一弟　右同人死三男
　　伊賀孫祐
　　私弟当家罷在候
　　右同断

一姉　武州小松川町住居
　　右同人死娘
　　佐藤玄珉　死　養女

一妹　右同人死娘

一　　人
　　弟当時罷在候

一叔母　大廣間席宗対馬守家臣
　　私祖父伊賀守悴　死娘
　　塩田揚庵妻　死

一従弟　私叔母悴　塩田揚軒悴
　　塩田土三

一従弟　ゟ徒目付伊賀美代守次男
　　養父楠松之助私續
　　実父私叔母智塩田揚翁次男
　　楠祐之助

一従弟
私叔母聟塩田揚庵三男
塩田元琢
父揚庵手前罷在候

一従弟 同兄子福田甲斐守組仮抱入
同兄子井戸内蔵組与力
私叔母死 聟井戸忠助伜
井戸勘十郎

一従弟女 徒目付並組別手組出役
井戸源三郎妻配
右同人娘
関根鉄助妻

一従弟女
右同人娘
一 人
父忠助手前罷在候

一従弟女 帝鑑之間席御主計頭
私伯父伊沢一安死娘
伊沢春庵妻

一祖父 母方
武州小松川町浅浦十郎
佐藤玄秀 死
寺内出生

一祖母

右之外親類無御座候以上
文久三亥年十一月
伊沢徳安

遠類書
伊沢徳安

遠類書

一従弟違　私従弟井戸勘四郎伜
　　　　　井戸謙二郎
　　　　　父勘一郎手前罷在候

一従弟違女　右同人娘
　　　　　一　　人
　　　　　右同

右之外遠類無御座候以上
文久三亥年十一月
　　　　　伊澤徳安

三代御咎等之書付
　　　　　伊澤徳安

一私祖父父私迄閉門逼塞差扣并遠慮其都而御
咎等被仰付候儀無御座候以上
文久三亥年十一月
　　　　　伊澤徳安

屋鋪書付
　　　　　伊澤徳安

一拝領屋鋪
　　　　　無御座候
当分御内於玉之池小普請後藤金弥拝領屋
鋪之内借地住宅
右之外ニ拝領地下屋鋪抱屋鋪抱地町屋鋪并
屋鋪自分者不及申支配向之親類縁者並家来
男女共所持不仕候以上

文久三亥年十一月　伊澤徳安

切支丹宗門改證文　伊澤徳安

切支丹宗門従前々無懈怠今以相改申候先年被仰出候御法度書之趣家来下々迄遂穿鑿候処不審成者壱人も無御座候依之家来譜代之者ハ寺證文ニ不及取置之年季一季之者ハ請人方ニ寺證文取置申候假服与請状ニ而も無之人召抱申候若此以後疑鋪者於有之者早速可申上候為其仍如件

文久三亥年十一月　伊澤徳安

諸願、無之書付
諸拝借有無書付　伊澤徳安

一　諸願申上置候儀無御座候

一　金二十両
右者私父伊澤磐安奥御医師之節文久元酉年三月
三百俵以下拝借金被仰付候節拝借仕候
右之外拝借金無御座候

右之通御座候以上
文久三亥年十一月　伊沢徳安

同姓書付
印鑑

伊澤徳安

一家元
同姓
杉本美濃守御師
伊澤道盛

一本家
帝鑑之間席
阿部主計頭御師
伊沢春安

一同姓
菊之間席
石川淡路守御師
伊澤龍阜

右之外同姓無御座候以上

亥十二月
伊澤徳安

飯田系譜

良野 休庵
同藩田能村柳庵男、飯田氏養子
妻同藩中川主馬家士高橋直左衛門女

信方 常庵、後休庵
妻杉本内膳正医師和田濟菴養女

復信 杏庵
真田右京大夫医師立田玄杏四男

女
養子杏庵妻

女
伊澤壽安妻

信謀 休甫
水野和泉守医師田邊玄樹弟
妻紀伊殿家士芦澤佐兵衛女

有間元碩

10
高知堂製

植村駿河守医師市川意安甥
妻榊原主計頭家士並河北右衛門娘

安貞 玄珉
妻新庄駿河守医師清水宗徽娘

飯田祐使

10 高知堂製

伊澤文書

二

H20
446

東京帝國大學圖書
B 23475
000432812 6

文化七庚午年二月以來

勤向覺書

伊澤辞安

一文化七庚午年二月七日私儀去十二月下旬ヨリ
足痛相煩引込罷在候而加藤遠江守様
御醫師岩村玄珉藥服用仕段々快方ニ
ハ候得共未聢与不仕就上藥湯江罷越候
ハヽ可然旨玄珉申聞候依之月代仕湯嶋
天神下藥湯江三廻り罷越申度段奉

鷗外藏書

願上候所即刻願之通山岡衛士殿被仰渡候

一同年同月廿二日私儀足痛全快仕候ニ付薬湯
中ニ八御坐候得共明廿三日ヨリ出勤仕候段御
達申上候翌廿三日出勤御番入仕候

一同九年正月二日卯ノ上刻妻出産仕女子出生仕
候間御定式之通血忌引仕候御達申上候

同月四日血忌引御免被仰付候青山岡
治左衛門殿被仰渡候翌五日御番入仕候

一同月八日此間出生仕候娘病氣之處養生
不相叶申上刻死去仕候七歳未満ニ付御定
式之通三日之遠慮引仕候段御達申上候

一同月十一日御番入仕候

一同年五月九日永井榮安成田玄良岡西榮玄
私右四人九山御殿江夜分一人ツヽ泊り被仰
付候段御用番町野平助殿被仰渡候

一同年十一月十三日奥御醫師一統并山田玄
升御叱被 仰出候間翌十四日朝差扣伺
差出候處其義不及候段山岡治左衛門
殿被 仰渡候

一文化十年癸酉正月十日私△義頭風相煩候ニ付
引込保養仕候段御達申上候

一同年二月二十五日頭風追々全快仕候ニ付月代
仕薬湯江三廻り罷越度段奉願上候處即
剋願之通被 仰付候段山岡治左衛門殿被

仰渡候

一同三月十日薬湯中ニハ御坐候得共全快仕候ニ付明十一日ヨリ出勤御番入仕候段御届申上候

一同九月十九日足痛相煩候ニ付引込保養仕候段御達申上候

一同十月二十三日足痛追々快方ニハ御坐候得共未聢与不仕且月代仕度段奉願上候處即刻願之通被仰付候

一同五霜月五日先年奉願上候而醫術内弟子ニ差置申候黒田豊前様御家来安西外記与申者悴了益今日外記方江差戻申候段

御届申上候
一同十二月十一日足痛追々全快ニハ御坐候得共未聢与不仕候間湯嶋天神下藥湯江三廻り罷越度奉願上候處即刻願之通被仰付候
一文化十一年甲戌正月廿三日足痛再追々全快ニハ御坐候得共未聢与不仕候間歩行仕度奉願上候所即刻願之通被仰付候
一同二月二日明三日ゟ出勤御番入仕候段御届申上候
一同月廿五日　昊葺（臺カ）院様御靈前江献備物願置候所勝手次第ト被仰付候

一同四月八日妻安産仕女子出生仕候依之御定式之血忌引仕候段御達申上候

一同月十一日血忌引御免被仰付候明十二日御番入仕候段御達申上候

一同月廿一日靈臺院様御病中出精相勤候ニ付金三百疋頂戴被仰付候

一同年六月廿日疝積相煩候所兎角不相勝候ニ付明日ヨリ引込保養仕候段御達申上候

一同年七月九日疝積追々快方ニハ御坐候得共未聢与不仕候間月代束仕度奉願上候所早速願之通被仰付候

一文化十二年乙亥五月七日私儀是迄外
宅仕罷在候所去六月中ヨリ疝積其上
足痛相煩引込罷在種々療治仕候得
共兎角聢与不仕兼而難渋之上久々不
相勝別而物入多ニ而此上所續無覺
束奉存候間何卒御長屋拜借仕度
奉存候得共病氣引込中奉願上候茂
奉恐入候依而仲間共一統奉願上候
所願之通被仰付候

一同月廿一日丸山御屋敷ニ而御長屋拝
借被仰付候

一同年六月十六日拝借御長屋附之品々御

拂直段ニ而頂戴仕度段奉願上候所
同月十九日願之通被仰付候

一 同年七月十七日井上筑後守様御醫
師下総國香取郡大和田村ニ罷在候
中野養庵悴貞純儀私弟子ニ御坐
候所此節專醫術修行仕度段再應
相頼申候私儀も内弟子ニ仕修行為被仕
度奉存候へとも病氣引込中奉願上候茂
奉恐入候ニ付仲間共一統奉願上候所同月
廿七日願之通被仰付候

一 同月廿二日丸山御屋敷拜借御長屋江今
日引移申候段御達申上候

一同年八月朔日先達而奉願上候私内弟子
中野貞純今日引取申候段御達申上候

一同年十二月十九日私儀去六月下旬ゟ病
積其上足痛相煩引込罷在候急ニ出勤
可仕體無御坐候ニ付
御機嫌之程奉恐入候依之此上之以
御慈悲御番勤　御免被成下尚又保養
仕度奉願候所同月廿五日以度願之趣無
據義被思召表御醫師被仰付候

一文化十三年丙子二月十七日
靈臺院様三回御忌御相當ニ付
御靈前江献備物仕度段奉伺候所伺之

通被 仰付候

一同年三月十三日一昨年六月中ヨリ疝積
足痛相煩罷在候所追々快方ニハ御坐候
へとも未聢ト不仕候間湯嶋天神下薬
湯江三回リ罷越申度奉願上候所即刻
願之通被 仰付候

一同年四月六日前文之通又々二回リ奉願上候
所即刻願之通被 仰付候

一同月十七日薬湯今日限御坐候所未快無
御坐候ニ付明日ヨリ引込保養仕候段御達
申上候

一同年五月六日足痛年月ヨリ重候とも全快

之程不相見候ニ付御座敷内又ハ他所ヨリ
急病人等申越候ハ駕籠ニテ罷越療
治仕遣度仲間共一同統奉願上候所同
月十三日無據病用之節ハ罷越可申旨
被仰付候

一同年八月七日下宮三郎右衛門殿療治
仕候ニ付御上座敷内駕籠ニテ出入御免被
仰付候

一同閏八月十六日醫術申合會頭是迄山田玄
瑞仕來候所此度私江相讓候段御達申上
候

一同年十一月廿七日昨年奉願上候而醫師内

弟子ニ差置申候井上筑後守様醫師中
野養庵悴貞純義今日先方江差戻申
候段御達申上候

一文化十四年丁丑十二月九日高木撤跡屋敷
御用ニ茂無御坐候ハヽ拝領仕度奉願上候

一同月十七日前文願之通被仰付候

一同十七日願之通屋敷拝領被仰付候ニ付並
之通拝借金被成下候

一同月廿日拝領屋敷江引移申候段御達申
上候

一同月廿三日御談御用御坐候所長病ニ付
名代山田玄升差出候醫術申合會頭出精

仕候為御褒美金五百疋被成下候旨関
半左衛門殿被仰渡候

一文政元戊寅年十二月廿三日御談御用御坐
候所長病ニ付名代皆川周安差出候所医
術申合會頭出精仕候ニ付為御褒美金
ニ百疋被成下候

一同二年己卯閏四月六日私従弟麻布鳥居坂ニ
罷在候町医師伊澤玄安与申候者病死仕候
ニ付御定式忌服受申候段御達申上候

一同年十一月廿六日私義明廿七日被為　召候所
足痛ニ付名代皆川周安差出候段御届申上候

一同月廿七日前文之通周安差出候所私義御

儒者被　仰付候医業ハ今迄之通ニ被仰付
候月並御講釋學文所出席ハ御用捨被
成下候

一同年十二月廿三日御談御用御坐候處足痛
ニ付名代皆川周安差出候医術申合會頭出
精仕候間為御褒美金二百疋被成下候

一同三年庚辰二月十七日　靈臺院様御法
事ニ付献備物仕度奉伺候所伺之通被
仰付候

一同年四月十二日今晩卯刻私義妾腹女子
出生仕候段御達申上候

一同日大御目付觸流ニ而被　仰付候

一同年十二月廿三日医術中合會頭出精仕候
ニ付為御褒美金二百疋被成下候
一同四年辛巳三月十一日悴良安医学出精仕
御満足被思召候御意奉蒙候
一同年同月同日次男盤安去年中文学出精
之段達
御聴御満足思召候段奉蒙　御意候
一同年七月廿三日左之願書相觸流新井仁助ヲ
以差出候処御受取被置候旨
口上之覚
私悴良安儀御序之節
御目見被仰付被下置候様奉願上候
右之趣不苦思召候ハ御年寄御衆中迄宜

被仰達可被下候以上

七月廿三日　伊澤辞安

大御目付衆中

一同日前条ニ付左之年齢書指出ス

覚

伊澤良安
當巳十八歳

右之通年齢ニテ御坐候以上

七月廿三日　伊澤辞安

但粘入半切ニ認上包半紙半分折懸上ニ年齢書下ニ名

一同年同月廿七日悴良安明廿八日初而
御目見被相請候ニ付私召連可罷出処足
痛ニ付難罷出左之通及御達候

口上之覚

私悴良安儀明廿八日初而

御目見被為　請候ニ付召連可罷出

処足痛ニ付名代新井仁助差出申

候此段御達申上候以上

七月廿三日

伊澤辞安

一　同年同月廿八日悴良安儀初而

御目見被　仰付候

一　同年十一月十三日

寛三郎様御嫡子御願之通被為蒙

仰候依之為御祝儀

若殿様江組合目録ヲ以御肴一種奉差上候

一　同年同月廿九日悴良安此度

若殿様　御目見被　仰上候為御祝儀
御家中一統へ御酒御吸物被成下候ニ付
右同様被成下候旨大御目付海塩忠左衛
門殿御談被成候間御酒御吸物頂戴仕候
一同年十二月朔日
若殿様　御目見被　仰上候為御祝儀
殿様　若殿様江組合目録ヲ以御肴一種
宛奉差上候
一同年同月廿三日医術会頭出精いたし候ニ付
為御褒美金二百疋被成下候
一文政五午年二月廿五日次男盤安去年中文学
出精ニ付奉蒙　御意候

一 同年十月廿九日明朔日悴良安　御用之儀
御坐候間私召連四時御坐敷江可罷出旨御
達書到来ニ付奉畏候旨及御請候

一 前条ニ付私召連可罷出足痛ニ付難召連候

一 尚表御医師織田玄琳ヲ以左之通及御達候

口上之覚

私悴良安儀明朔日
御用之儀御坐候ニ付召連可罷出処足
痛ニ付待川周安差出申候此段御達
申上候以上

十月廿九日

伊沢辞安

一 同年十二月廿一日次男盤安学問所江月ニ八九度出

席五經之素讀教遣其上宅ニテ後いたし遣
候ニ付金二百疋被成下候

一同年同月廿三日医術會頭致出精候ニ付金二
百疋被成下候

一文政六未年十二月十七日次男盤安去年中文学出
精ニ付奉蒙　御意候

一同年三月廿六日末女病氣之処養生不相叶
今暁丑中刻病死仕候処七歳未満ニ付三日之遠慮
引仕候旨合御觸流ヲ以及御達候

一同年六月九日合御觸流小野栄順ヲ以左之通及御達
候処勝手次第与半左衛門殿申渡候旨同人ヲ以
御談ニ付御請申達候

口上之覚

河村意作悴元監儀医術為修行私方江当年中
逗留為仕度、御達之上罷越今日到着仕候ニ付
之逗留中差置申度奉存候此段宜被仰
達可被下候以上

六月九日

伊澤辞安

但半紙粘入半切上包半紙折懸ケ上ニ名

一 同年同月廿九日河村元監儀私方江逗留中松平
大膳大夫様御医師南部伯民与申者方江も同様
為修行日々罷越申度奉存候処右同人塩留御やし
き二而遠方甚ゝ元監儀痔疾氣ニ付通ひ候儀
難成且伯民儀も来月下旬歟八月上旬ニハ帰郷ニ付

江戸表逗留中右同人方江止宿仕度旨先達
而御目付衆迄相伺出候処不苦旨右御役場
迄及御達候様尤出仕御帖（モトノマヽ）（帳カ）等有之節ハ私方ゟ
元監迄可致通用旨御談有之候

一 同年七月朔日相御觸流西富良碩ヲ以左之
通及御達候

口上之覚

一 河村元監儀医術為修行私方江罷越候ニ付
先達而御達申上引取置候処此度松平大膳大夫
様御医師南部伯民方江為修行罷越申度
候処此節元監儀痔疾ニ而日々罷越候儀難
仕候間当分之内右同人方江罷越逗留仕度旨

申聞候間任其意今日差遣申候此段御
達申上候以上

七月朔日

伊澤辭安

一同年同月廿九日左之通相御觸流小野榮順
江以及御達候

口上之覚

一河村元監儀先達而御達申上松平大膳大
夫様御医師南部伯民方江医術為修行
罷越逗留仕候処伯民儀帰郷仕候間今
日私方江罷帰申候此段御達申上候以上

七月廿九日

伊澤辭安

一同年八月朔日

殿様御不快中拝診被　仰付候ニ付爰元
御門並丸山表御門刻限過出入共定御
移被下候様岡西玄亭ヲ以及御達候処
勝手次第与申被仰聞候

一　同年同月四日左之通相御觸流小野榮順
ヲ以及御達候

河村元益儀医術為修行私方江罷越候ニ付先
達而御達申上引取置候処今度西尾隠岐守様御
医師天野道順方江為修行罷越申度旨此節
元益儀痔疾ニ付日々罷越候儀難仕旨尚当人之
内右同人方江罷越逗留仕度旨申聞候ニ付其
意今日差遣申候段御達申上候以上

八月四日　　　　伊澤辞安

一　同年十二月朔日左之願書付相御觸流西富良順
（もとのまゝ）良順ヲ以差出候処今日多膳殿江被差出候処
即刻勝手次第一緒ニ出立いたし候様被仰渡候
真助殿御談ニ付御受申達候

口上之覚

河村元悦儀於御在所欠意作御達申上医術
為修行私方江罷越当時西尾隠岐守様御医
師天野道順方江罷越修行仕居候処此度伝授
も相済候間逗留日数中ニ八御坐候ヘ共来三日
（本ノマヽ）嶋田宅殿（日定右衛門）出立ニ付元悦儀も一緒ニ出立仕度
旨申聞候此段御達申上候以上

十二月朔日　伊澤辞安

一同年同月三日私先達而御達申上置留為仕置
候河村元盈儀今晩寅刻福山表江出立仕候旨
相御觸流山田立順ヲ以大御目付服部三木
三殿江及御達候

一文政七申年三月十六日
若殿様御願直御袖留為御祝儀
西殿様江組合目録ヲ以御肴一種ツヽ奉差
上候

一同年五月三日左之願書付相御觸流玄順ヲ
以大御目付稲生傳右衛門殿江差出候処今日
角右衛門殿差出され候処御受取被置

同七日願之通勝手次第ニ被仰付候

口上之覺

私儀領仕候

御紋附類惇良安江着用為仕度奉願上候

以上

五月三日

但粘入半切認上包半紙折懸上ニ名

伊澤辞安

一同年十二月廿三日医術會頭出精ニ付金二百疋

被成下候

一文政八乙酉年四月三日忠琢ヲ以差出候処同

月七日願之通被仰付候

口上之覺

松平播磨守様御家來小川吉右衛門蛕酒

一 井安清ト申者秋元但馬守様御城下羽州
村山郡山形ニ罷在候郷士小林忠右衛門悴
玄瑞ト申者四谷内藤新宿ニ罷在候町
医師多々良玄達悴敬徳ト申者右三人私
医術之弟子ニ御坐候処今度引取内弟子
ニ仕医術修行為仕度奉願上候右之趣ニ而
昔思召候ハ御年寄御衆中迄宜被仰達
可被下候以上
四月三日
伊沢辞安
大御目付衆中
一 同年同月廿七日先達而奉願上候内弟子松平播
磨守様御家来小川吉右衛門悴酒井安清ト申
者秋元但馬守様御城下羽州村山郡山形ニ罷在

郷士小林忠兵衛悴玄端与申者四谷内藤新
宿ニ罷在候町医師多々良玄達悴敬徳与申
者右三人今日引取申候段及御達候

一 同年五月三日左之願書玄亭ヲ以差出候処
同七日願之通被仰付

口上之覚

西尾隠岐守様御医師天野道周与
申者私医術之弟子ニ御坐候処今度
引取内弟子ニ仕医術修行為仕度奉願
上候右之趣不苦思召候ハヽ御聞寄御
衆中追而被仰達可被下候以上

五月三日
伊澤辞安

大御目付衆中

一 同年六月十七日先達而奉願上候内弟子西尾隠岐守様御家来天野道周与申者今日引取申候旨及御達候

一 同年十二月廿三日医術会頭出精ニ付金二百疋被成下候

一 文政九丙戌年二月十七日
霊臺院様十三回御忌御法事之節御霊前江献備物仕度奉伺候処勝手次第与七左衛門殿被仰渡候段東條真助殿被仰聞候

一 同年三月十七日左之願書付差出置候処同月廿日願之通勝手次第与平助殿被仰渡候

口上之覚

私儀足痛所持罷候ニ付不出來之節ハ
夏中足袋相用申度奉願上候右ノ趣
宜敷被仰達可被下候以上

三月　　伊澤辞安

但粘入半切上包半紙折懸上ニ名計

右伊澤德所藏蘭軒自筆文書大正五年五月十八日謄写畢　源高湛

伊澤文書

三

H 20
446

伊澤蘭軒

淺草新光明寺に宗家伊澤の墓三つあり

一、先祖代々之墓

伊澤主水源政武

二、德源院殿讓誉礼仕政義大居士

元治元年甲子年七月十六日没

明治三十五年七月建

伊澤家施主八幡祐親

三、顯享院殿秀誉寛真政達大居士

明治元辰年十一月二十五日

明治三十五年建

一 同墓地ニ何太盈蔵ノ墓アリ隣地ニ接シ将ニ崩レニ

鷗外藏書

東京帝國大學圖書印

B 23475

0004328134

トス而ル八十六石ニテ天保十年使番トナリシ人ナリ

○伊澤ノ宗家〈福岡藩〉

梅（春庵女）
全（春庵）女

女　梅畏父妹、磐妻、猶存、

德（春庵子、ジャパン、タイムス社々員、牛込区市谷富久町一〇七）

父歿後

榛軒　長安　後一安

文化元年生
嘉永五年十一月十七日歿

女子　名かえ

初嫁畑田全庵　安
再嫁春庵

明治某年歿せしナラム

○伊澤蘭軒〈分家丸山伊澤〉

〈分家本郷伊澤〉

年五十
配ハ猶女

柏軒　磐安

妻俊子、狩谷棭斎女

女子　嫁狩谷氏

保親善

磐　幼名鉄三郎、後磐安、維新後改磐
嘉永二年生、明治三十八年歿、年五十七
配榛軒之孫女

女子二人

信平　万延元年生
藍神谷

某 信平庶子ノ曲
赤坂区氷川町四〇 女婿清水夏雲方寓

蘭軒親戚

姉 小普請組仙石備前守組支配麻布古川住 坪田新[illegible] 三平妻

父方

伯父 武州越谷領七左衛門村郷士 井出徳助

従弟 麻布鳥居坂住町医師 伊澤玄庵

従弟女 右同人妻

従弟 神田白銀町住御菓子師 大久保安水

母方

叔父 遠州豊田郡竹之内村住町医師 寺田简節

従弟 武州河越領大久保村住町医師 大澤周安

以上

井出氏ハ吉兵衛別家ニシテ再興ス伊奈半左衛門
代官ノ時在役ヲ勤ム郷士ト云

10
高知堂製

蘭軒親蔵

門次郎　隆升軒幼名　六十四歳

好信軒　天和三年生　享保十八年死　五十三歳

幽林軒　七十三歳

穪仙軒　五十三歳

梅林院　幽林軒兄

流芳院　好信軒父　廿二

亨吉軒　妙林院子

蘭軒卑属

蘭軒子

玉顔智英童女　於鉄　文化三年丙寅夭五歳

○椎枕軒　信厚

華岳春晃居士　常三郎

○磐安

智白童女

究竟院妙等日理大姉

右三子三女和泉院出

馨香童子

10
高知堂製

花影童女

覚心禅童女

右一子二女佐藤氏佐与出

檪軒子

幻洗心童浮女　横田氏出

幻光童子　鉄三郎　天保四癸巳生　同五甲午十二月廿六日死

○栢　春田淳良妻

示幼孩女

長春院叔母　黒川道祐子　竹葭原芸庵　元蔵井通有　水臆桃原平兵衛　御気瑆姪庵

10 高知堂製

蘭軒手柬

前切レテナシ

一 今日ハ氣合少々ハキト仕候而人ニ抱レ居候而ヨホト濃キ米湯ヲ今朝ヨリ両朝三杯タベ候頓首

榛斎様　辞安

秋園詠所見三首

世上栽蘭各自誇。蜂英蕃葉映窗紗。要知楚畹真香物。請看簇生深紫花。右蘭草

草莖經雨足餘長。彩暈染成十樣章。誰是斷裁金谷錦。何吾遊園晒秋陽。右十様錦

牽牛翠蔓縈籬色。碧玉千鍾富欲誇。曉夢平生辰後覺。秋來早起看新花。右牽牛花

蘭軒

避世
儒宗

塞下曲

不脫甲衣幾值春。沙場百戰歷胡塵。漢家兵士

千餘萬。誰是麒麟閣上人。

伊澤信恬稿

笑仙先生十七回

花のもとに醉ふして兎ふを手向ん　陶後

右伊澤德所藏短冊

げぢになめらるゝ事

俗諺に、げぢに舐らるゝといふ事あり、太田全齋翁云「伊澤辭安曰、俗間に頭髮のふと脱て、銭の大さ或は指のはらの大さ程はげたるを、げぢに舐られしと云て、げぢくいの事とせり、此のなせしわざならば、はひしとも云べきを、昔よりなめしといひきたれるは、故ある事ならん、此の事にはあらざるべし、下食（ゲヂ）といへる鬼に舐られしと云る義なるべし、漢土にて、鬼舐頭と云病あり、證據左に附す、

江次第云、追儺後、主殿寮供御湯、註、雖當歳下食、猶供、按印本は下食を月食に作る、今度安抄本に従ふ、一條禪閤鈔云、「其日註暦、下食者鬼神之名、此日沐浴、則鬼舐頭而髮落、故憚之、倭名類聚抄瘡類云、病源論云、鬼舐頭、師説、為天狗下食所舐是、人頭或如銭、或

如ニ指大一髮不生也、暦側曰、歳下食は、天狗星の精下界に下て食を求むる日也、吉日なれば妨なし、凶日なれば忌むべし、片暦家古来相傳書、捨芥抄云、下食曰、沐浴誦妙善王、金著女、追杖鬼、参尾王、波羅々鬼、又云、下食曰、自ニ節中一計レ之、又毎日戌日定ニ下食一也、未正、戌二、辰三、寅午子申巳亥丑卯、信恬按、古諸説は隋唐に原きし古傳なる故、鬼祇頭等の字存せしならん、されば俗説のげじはげじきの約りたるなるべし、げじきは今の假名暦にもあり、」

十

清川玄道

小山良哉

小野榮順

皆川立庵

海津川的

馬屋原周迪

千川仙之助

飯田幸珉

木村昌碩

横田宗禎

高適溪

門人　○蘭軒門人録ナルベシ

初玄索マヽ　江戸ノ養子ニ完玄道ノ跡ヲツグ　保云、初安策ハ父ハ玄道、順

初山本　嶌原本国三嶋

初順民

后民周安

米津小大夫臣

藩　○福山藩ナルベシ

鍊馬

舊姓秦　星地氏　岡

江戸ノ

宗春子　十ノ字内藤

横田宗禎　禎弟　亀山

○秦星池、名其馨、字子馨、一号菊如、齋、通称應蔵、江戸人、胡兆、新内人、文政六年三月八日死、年六十一、子鐘、字俶美、称源十郎、号星塢、

横田宗橘　高通健　通滉早死ニ付跡目
高橋宗翔　宗春門人　岩撥平
山内玄眠　府内
森田良慶　初赤尾　青木啓索　久居
下條玄周　高崎
成田元清　藩
服部良醇　大洲
中川宗俊　同
工藤鍾伯
稲見元周　村松
内田由松
坂上玄篤　玄文弟

田端立悦　浅草
高橋玄貞　弘前
伊東宗三　津
宮崎隆卿
中丸昌意　昌安父　弘前　保之昌庵　文政元年生　明治三年死
井上宗仙　横須賀
天野道周　弘前
山本宗英　宮
井上元良　元瑞　宮
田村良安　同
坂本養敬　同
櫻井哲安

佐々順安　藩
山田玄順　水戸府中
手塚良元
小笠原蒼軒　栄吉　小倉
末永順栄　柳川
井上玄民　同
和多田玄順　岡崎
谷村敬民　狩谷縁者　大須
山上規矩庵　小倉
内山安貞　古寿ノ縁者　杉戸
小山蔀安　良哉ノ子
杉山恵四郎　三八ノ父　後称玄圃又寿安　江戸

岡西玄亭　藩
森養竹　同
濱江道純　弘前
山田昌栄　高崎　椿庭　業廣
小野道秀　弘前　後塩田楊庵
小林玄瑞　對州
有馬宗綏　棚倉
數兆安　今春安　藩
多々良敬徳　後文達　江戸
吉田友賢　高崎
村士道雲　道順ノ養子　藩
海津安純　川向ノ子

成田良純　今ノ竜玄　藩
呂川順庵　同
川上玄室　備中
津山厚伯　宗伯ノ養子　藩
津山宗庵　同
津山篤庵　同
五味玄隣　久井
安田了益
益子宗隆　吉田
洞順　亀山
中野貞順
谷吉　信州

井上平筑　福山御坊主　藩
村上甫水　忍　藩
五十川順益
鈴木杉渓　錬馬
新井徳順　江戸
栗原玄順　同
宮城玄亭
吉村竜翔　藩
永井栄安婿
親安意庵縁家
松葉昌貞
河村元益　藩

劉以貞與蘭軒

別後積思。山高水遠。無由翹企。曷勝神馳。回憶舊秋
襜帷臨崎以來。久仰
山斗。急於趨謁。予性古癖。不屑俯就權門。故多時
蹉跎。不意今夏卻蒙見招。方擬
芝標。傾蓋僅兩次。奈因
尊大人訃音至。遽即東旋。何相見之晚。而分離之速也。念
一及之。未嘗不拍膝而歎。伏惟
先生途中及還來
起居諒加綏寧。稍慰遠懷。

素旆帰郷。縦有風木之慼。亦須以禮抑哀。予頃讀
琵琶記。亦為悵然。所言崎陽歳時諸史。今果否。
賦完。若俟鴻便寄来。以開茅塞是幸。再晤
何時。臨緘無任依切之至。

右呈

伊澤蘭軒国手先生

霽照

劉以貞穆庵拝

龍壽

尊候清勝為吉。蜀酎壹罐。曩者辱賜厥箋。是江都
佳製。可謂奇珍。乃欲服出函。一々反覆之。光彩燦爛。
冰泉天台五色之霞乎。至於讀其函上記云。不用楮。不
加糊。久儲不蠹。益知夫呉船所齎諸品大異。深
感厚意。不知所以謝也。偶得詠詩一首。書以呈上。一
得電覽。則幸。惟愧巴歈下調爾。

敬上

白龍壽和南

龍壽

都梁伊澤詞兄文榻下

石香齋

正月十六日与伊澤先生及諸子同遊雜吉十分園
々中野梅万餘株花盛開闔韵得八庚
十里城西試軸罨村園花満玉瑩々共言今
歳歓遊好先卜梅郊爛縵晴
又得三肴
百樹梅花正暮郊花間吟酔倒芸匏村翁也
解留連意折贈黄昏月一梢
翌日大雪戯呈伊澤先生又用前韵

料峭春寒欺囀鳥満林花雪鎖晶瑩天公為
梅仙遊跡不使佳人展嫩晴
明日尋梅酔晴郊今朝対雪酌寒花満園雑
樹君休伐留看瑶花綴萬梢 先生謂余曰欲悉
伐家園雑梅而植梅花

笑改

鈍樹再拝具草

鈍樹
梅花
陋室

10
高知堂製

十七

正宗院與狩谷氏仮書

月日ナシ歳暮ノ祝儀ナリ
「正宗院」ト署ス
宛ハ「伊澤盤安殿御うもじ殿」トアリ
能書ナリ

嘉鶴声々、對旭飛。陶然酔美弄晴暉。轉

依信友憐余力。不待來年知了非。

壬子元旦　厚拝

右伊澤徳藏幅

石川元亮

病のたこたり給ふこと祝ひ侍りて

千代こもる園のなよ竹雪消て元の姿に
かへる春哉

あひ思ふ君か木筆とちりしより理柚
さはしくも成まさりけり

ぬれにける袖のひる七想くり来て去年の

今日にしもなりにけるかな

椿軒大人の廿三回忌にあたらせ給ひければ

しも深くふりしを思ふ袖の上に月は

其夜のまゝにやとすらむ

椿軒先生の三十三回忌にあたらせ給ふとて

その昔袖にやとしゝ月影をけふハ泪に

あらためつるかな

右伊澤徳所蔵短冊

天楽

余多病託治於福山侍醫伊澤一安久矣今聞

其訃音不堪痛惜之至悵然有咏

天地空留医国名。何図一夜玉山傾。魂帰冥

漠茫無跡。再度難聞笑語声。

誠園稿 [尋] [守真]

右伊澤徳蔵幅

四十九年繁華夢。他作寒風一夜霜。

嘉永壬子十月之望棣先生口詩授信重

文久元年霜月十六日信重書與信淳

右伊澤徳所。幅　。藏

榛軒門人

塾頭

福岡

棚倉

同

幕府

太田

福山

同

同

森隆仙

黒川雲岱

清川安策

栄田常庵

栄田修徳

三好泰令

山本頤庵倅

手運良運

三好統安

前田安貞

皆川順庵

同
土屋
棚倉
津山

岡西玄庵
嶋村文貞
山口安文
須川隆伯
泉　安隆
栗原玄順
石川南淳
竹内立賢
坂上玄丈
清川玄策
柴田方庵
雨宮良通

川越
九鬼
同
同
同
同
同
同
上野
幕府

木村容菴
嶋村周庵
澤　玄徳
関川順安
成田競玄
笹山道仙
飯田安石
石川貞白
森　美真
古志祐安
田村玄理
浜江道陸

淀
福山
福山
福山

井口栄春
岡村ヨウセキ
三好安石
赤道斎
鼓菊安
渡邉昌栄
矢嶋元碩
高井元養
服部辰庵
天富喜安

鹿児嶋
金澤
仙臺
熊本
福岡
廣嶋
萩
岡山
鳥取
徳嶋
高知

十八国主

佐賀
津
松江
福井
名古屋
和歌山
水戸

天保十四 癸卯
弘化元年 甲辰

木村定良

福山の君につかへたまへる伊澤ぬしくすしのつかさ
たるものゝ座まハさるとひ医学館ありて其すちの
のみな講説をしえつよしわかやんのわかさあまた
かゝりたまへるをいとしかるへきことなり
も有るれさるをわかちの君福山の数にめされ給
ひさしき五十年餘をそへさせし十一月廿八
日ハその日ときくに人々子伴といはへしへとせのひ
ならし今もかく其わさのさかえ行まとよろ

これひとへにそのほうびきうる時おのれも祖父君より
しとく父君今のあるじまで心へたえずおもふにも
なをほとく守やくられたまはたえし哭ゆかりなる
らするなり
家村の色ゐきつゞき哉し三代まで伝えて崇世り
名高うれけき於ものして

定良

茂樹

三月八日夕つかた伊澤ぬしとかたらふ

よめる

花散し梢あやなくなりゆくを情もなき苔

茂樹

路たえられてよしし
木ゞまもりもわくる月かげ影たえの庭ぞ
ちりしれたれのいろの花
あやなくもちれゆく軒の花かげたえみよらむ
月かげほのめきぬらん

門田樸齋

送榛軒詩題白蛇峰欲白蛇峰土名蛇園山（ジヤヱンサン）

天保元年十月廿日伊澤榛軒
留守宅傷寒論輪講發会
行集マリシ人ヨリ傳言左ノ如シ尤モ各自書
ナリ

磐安曰

道純報告

御出立之砌ハ参上得拝眉大慶不過
之候益御清穆御道中種々珍事可有
之奉恭喜候廿日ヨリ傷寒論講釈相
始候處諸君子講甚面白シ輪講ノ所
ハ畢候ニテ兵候ニ物ハコハズ一僚ノ各講
久當餘後便一刀々不具
副啓去ル十七日万落書主人頓死

玄亭謹啓 御道中御壯栄欣抃吟詠可想

高知堂製

蒼竹啓

今日ハ駿河路上奉掛御目候定而不
二ハ大きからうと奉存候 御上益御
きげん能奉恐悦候 是木腐向芝居
殺ロ木挽町 先は居なりの由 路考半
分すけ也 吹屋ハ名代七枚に而秀桂
秀佃関三常世序市甲也印業
若也 中村座ハ今近之町へ分米三店入
候由 先評判也 いづれ其中政説可申
上候 ○道中ちんぞ不相ならぬ薬草
ハ見當らズや 御心かけ奉願候 以上
立之再拝

昌栄啓上
候道中すり帶 今ニ以着可被成奉

抄加外吐 年々帰ゝ節の進、出居中外並
に大朔ヒ躍も未見仕候 先の吹上見之
遣ゝ申候

道秀啓白
此度中深帶之趣 恐悦奉存候 扨
当立後火事沙汰等も一すり無之候 大
悦ニ奉存候 下悴ハめ方ハ此すめ習教の為
此度中切角の自愛 專一奉存候 今日ハ駿
河路ハ由不二ト御豪奉書察候 吹豪
ハ尚さらと奉存候 高度うかみ申候
ほちめんに不二のすそ有る小春
以一笑御下の御笑に

玄端曰
先生ハ此度中すり帶古大慶奉下掛候

芳問留守いたし候而存ハ御菓子ニ而預り候

宗信 謹呈 存中旅居 除り店出奔いたし

田村元 右碑様 快晴仕り存中ニ御無ト奉存候

何卒珍敷為十木ネセ拳ヲ偏ニ奉仰候

安純 花中無益ニ而めてたく候

篆跋 ハ花中一口也 ハ自出度存候猶ヲ

金鳥 イロイロゴキゲンヨクガシテマツリ候

良琢 ゴ花中リキゲンヨク朝夕サムク候

松逸哉 向ハ花出ニ而晴勝ニ候年喚ヒ成候由 存候拘

扇之口ノ写候 不存意ハ兄ハ無ク上候ハ当

門様御記 無心 仕候一同ハ雑可申 宜候

(下ハトジコミアリ)

柏軒

天保三年壬辰三月六日。随梔齋先生。與抽齋兄同遊。至羽根澤。見慵堂先生。其居在長谷寺之口十町許。下阜徑田。又上高阜。而深林之中。即其隱居之處也。在前丘之上。望之与其居相対。茅茨七八椽。有小樓。上室者先生之齋前園有方池。命子童子岡水。下室者門生之塾。読誦之声。朗々。梔齋先生贈雁。信寓贈酒。抽齋亦同。飲酒談笑數刻。告別。而帰路上前丘。後面大呼火。回看慵堂先生与両三童子同戯。焼園中之草。共哄笑。

七日。日記作一小冊。高田子強。磯野子從。作余
造之。此日瘟科鍵之會。京先生看觀世一代能。
不在家。
八日。余甚嗜甘旨。甘旨不去側。今不食甚嗜之甘。
而磨琢志意研究信仰。
九日。雨。山崎宗運法眼開茶宴。請君倩為賓。
荏屋先生為主接賓。以故休講傷寒論。大
兄為直上郎。
十日。晴。晩雨。後霽。大兄講外臺。
十一日。晴。晩雨。又晴。就淺草將茗先生之居。
寫通藉録。
十二日。晴。煩悩不會于心田。

十三日。晴。
十四日。晴。
十五日。大兄講外臺。
十六日。晴。大兄欲伴妹掃墓。有事不得行。故
小人代行。谷村學甫隨。岡西德瑛。成田竜玄壽
有約先小人至。帰路如溜池築前侯邸中伯母
正宗院。不在家。
十七日。祭孝。浜江抽齋。森。山田。有馬等來。
十八日。如羽柘澤慊堂先生之家。棭齋先生
与慊堂先生讀李如圭釋宮。浜江全善。信
重在側聞之。高野山有文館詞林二十卷。有冷
然院印。冷然院圖書之府也。文德實録。冷然

院火。後局改象。印記始于此。古本貞觀政要。假
借傍訓計左否。

榛軒與柏軒書

足下學問醫業相応出来候ニ付出精も致候て一廉成居候
而父祖之名をも不墜且ハ足下先年上向より申達候筋も
相立可申之所性来惰慢勝ニ而言行麁鹵致立身之程
無覚束存候得共外宅等も致候ハヽ又々別段慷慨之志
も發起可致事と存候而一昨年外宅為致候所矢張憤發
之思慮も無之僅一箇年之間見届不申事共有之某存念
と相違致其上是迄月々之雜用仕送存外之入用相嵩此姿ニ
而者標本共ニ衰滅ニ及可申乍去足下所業次第ニ而如
何様共寛ニ若相凌致遣方も可有之之所足下一分之思慮
も無之識見不相立性来とは乍申兎角懶惰萬事心ニ不
用此上ハ最早術計相盡候次第ニ候 依而此度甚恥辱ニ候

得共又々某方ゟ引取手元ニ而養生爲致遣可申候尤外宅以
前同居之節之振合とハ違衣食住とも十分には手當不致
其外所業迚も是迄と違ひ萬事指圖可致候間左之條々堅
可被相守候

一毎朝藥劑調合出席可致候調合相濟候得者部屋ニ罷
在讀書勝手次第之事

一病用之外他行致間敷候事

一病用來客之外假令懇意之人たりとも妄ニ應接不可致候
事

一部屋之内へハ朋友ト雖一切通申間敷候事

一衣食住之義ハ指圖次第相守可申事

右之通急度可被相心得候以上

五月九日

長安

磐安殿

柏軒與石川良琢書

貴体清和恭喜之至候陳者過日如願早速御光来且小生心事御談申上候所先御領承被下多謝不過之候其節如仰於小生者一条遣ニ貴君ハ御頼申上無他宗存居候間何分宜御取計奉希候又計者以密為善と文有之候ハ此事成就仕候迄小生社中愚兄浩江等ハ御評議無之御秘可被下候但ニ貴君御心友ハ小生名字顕サ而宜候間御相談十分ニ御調奉希候事成候以前小生友人ハ御沙汰無之様偏ニ奉希候尚委曲拝尊面候時可申上候恐々頓首

五月十一日

良瑛賢兄左右

信重拝

湯村彦甫與石川良瑛書

愈御萬祥奉賀候然ハ昨夜両国（羅越候所客来有之）例之内條御咄申兼候何ル又々近夜可罷出奉存候尤其前御出ニ相成候ハヽ御直ニ御咄被成候而も不苦儀と相考申候間御寛話御出来被成候御都合ニ致ハヽ御咄可被成候御同藩様如何ハ御手代一寸相伺申外先日頂戴之御薬ニ而大ニ回数御座候尚又洗薬二貼賞薬戴度奉存候以上

五月十六日

彦甫

良瑛様

柏軒與石川良琢書

梅雨漸晴候所起居益御清安奉抃喜候然者例之内藤山王町両國様御請被下候哉日夜渇望仕居候間右奉伺候当時一生桂命之所ニ御座候間何卒貴君以御精力御取計成就被下候様偏ニ奉希候余拝眉千萬可申上候恐々頓首

五月廿二日

伊澤磐安

拝

石川良琢様

湯本彦甫与石川彦瑛書

過刻ハ御出被下候処他出不得拝顔遺憾之至奉存候
所詮西国ニ罷成委細御咄申上度右ニ付拝顔仕度候
間晩程ニ入来可被下候明朝ハ青山屋敷ニ罷出候ニ付
寛々御咄申上兼候此段得貴意度如此御座候頓首

五月廿四日　　湯本彦甫

石川彦瑛様
要用

柏軒與石川良琢書以

梅雨淋漓鬱々御座候所益御安清奉恭喜候昨日
ハ参上仕候而例之一除以御厚情湯本氏両国様之被
参呉御願先生御承引了其上貴君先丸山ハ内々之事
御願被下候様千萬難有奉存候然処帰宅之上にて
得と相考候ニ先両国様て御承引雖成所湯本氏之
萬意ニて断御承引之所又候貴君御出被下入塾
以前ハ長安方ハ内々ニ被遊候様ニ御願と申候ハ餘
り自由手前勝手ニて恐入候間因て今朝丸山ハ参り
入塾之（以下切レテ無シ）

柏軒與榛軒、天保元年十月

俗情険衢ノ千層浪、時事ノ危登百尺竿、頼有西窓書一架、暖風晴日閉門看、右于華寄陳時應、前句ハ大兄ノ身、後句ハ小人ノ身ニ有之候、大兄心配ハ身ヲ安ンスルニ地ナキ程ノ事、察シテ言フコト能ハズ候、其ニ引キカヘ、小人暖衣飽食ハ勿論、外ニアレバ朋友親信シ、内ニアレバ姉妹安和シ、又頗ノ適病人モナク、十分ノ清閑ヲ得、十分ニ読書シ、又其暇ニ書房ニテ雲堂ト小音ニテ浅間ヲ語リ、放言シ、脚爐足ヲ煖リ、床褥ノ上ニ在テ茶果ヲ健啖シ、誠ニ無上ノ歡樂、宇宙ノ内何ノ事カ之ニ如カム、實ニ

恐ロシキ程ノ事、罰ニテモ当ラムカト、其ノ三昔ニシ候、
右ニ付小分次第ニ譫語ス宜シク妄聴シ玉ハル可
ク候、先ツ大兄ハ先大人ノ子ト云所カラ、弱冠ニシテ
登庸セラレ候、正大ノ直言ヲシ、御叱ツ被リ帰サレテ
モ宜シク候、然シ是ハ侍ノ事ニテ、帰サレテモ外ニモ
忠臣アル故、格別ニ事ヲ闕ズ、立派ノ忠臣也、私
愚案ノ真ノ忠臣ハ大兄ノ角力ノヤウニ致シタキモノ
ナリ、何分ニモ打ツテモハタイテモ、地震ガアラウガ雷
ガ落テモチヨウガ、粘リ附キ給ニ附テ放サズ、縦令親父ノ名
ヲ汚ス様ニ成ズト云ハレテモ、ナンデモ詬ヲ忍ンデ主君ノ玉
体ヲ見届ケルガ理当ズンカト存ジ候、即チ腹デスル忠臣
ナリ、ヤウナ事ハ千百年ノ以前ニ御存知ユエ、言ウテモ

言ハイデモノ事ヲ、カレ、ヤクタイモナイ

芸庵君口授ノ事

（安政六年（五カ）八月二十二日侍医）墨字ハ唐井所傳之

御目見當日（コレハ安政四年十一）

帯先地黒琥珀 織出蔵桒

手巾先地白晒布

懐中一刀紫覆紗

侍麻上下 両羽持 後ヘヨセ一本差

世話役

多 楽真院

野 壽昌院

多紀 安亮

手傳

小嶋 春庵
喜多村 安斎
谷辺 道玄
勝本 理庵
森 雲禎
熊谷 弁庵

借[illegible]役

井狩大之丞
三浦次右衛門

本郷

伊藤治右衛門

愛宕下三サイ小路
芝原町
神田須田町
四谷坂丁
小日向金剛寺坂
小八丁堀坂本町
薬研堀
八丁堀
薬研堀
村松町
小川丁裏神保小路

中嶋 玄順
牧野 雲元
羽佐間 宗玄
宇山 隆卓
田村 玄呂
上林 了斎
大杉 寿庵
加藤 善庵
佐藤 仲徳
竹内 養寿
印牧 玄順
雨森 宗益

茅場丁
本石町四丁目(?)
三十間堀三丁目
茅場丁
日本橋音羽丁
小川丁
六番丁(?)
日本橋エルカ丁(?)
南八丁堀
木挽丁(?)
飯田丁堀留(?)

佐渡 文仲
河村 宗潜
滝口 康寿
湯浅 克民
溝部 有山
林 玄仲
岩名 昌山
橘 尚賢
高井 元益
清川 玄道
瀬尾 昌玄

カノヤシキ

住吉丁
酒池(?)

○

寄合医師肝煎
久志本 左京
勝本 理庵

井岡 友仙
稲葉 文宅
池田 瑞仙
小野 蕙園
曲直瀬 養安院

四十三

六月八日初番入 五ツ半時前出番 統安ト交替 統安 ○
引回シニテ大御目付武田へ当番角御徒目付へ頼ミ

出し御小姓頭部屋ニテ于淵奉伺御機嫌御鎰板宗
由四ツ時過明日御膳之御肴板拝見直舎へ忠琢玄
統玄亭来統安大目附へ御舎也左之通
一足込之所ニ住居仕度旨大目付小藤大殿ニ申候処何
レ申合之上是ヨり挨拶可致之由
一御礼之達口上覚
私儀御序之節ニ召出之御礼申上度奉存候此段御
達申上候以上
六月八日
姓名
一足袋願口上之覚
私儀当時足痛所御座候ニ付難義仕候依之全快
仕候迄足袋相用申度奉願上候右之趣宜被

達可被下候以上
六月八日
○
姓名
当番ノ節炭茶持参
○
上原金八郎
○
金安、貞白、磐安三人ニテ相勤交代
○
交代
覚
一御扶持方通一通
右慥ニ受取申候以上

月日

御藏奉行中様

米毎月廿日午迄渡

銀扶持　大ノ月廿九日小ノ月廿八日

姓名印

万延元年文久元年〳〵二年

表交代

卜仙　玄瑞　澄庵　玄意　快庵　章庵

廣敷交代

玄叔　三伯　元礼　尚常　碧安　家琢　永寿院入

奥詰　診順

理菴　良甫　収菴　了伯　玄琇　宗洪　洞由　弁庵

玄琢　隆田　道隆　隆玄　去庵　昌碩　尚由院

祐玄（仙貞　秀貞）

奥詰除隠居江父子十六人

雑科三番出

四十五

自伯　宗達　祐益　宗格　雄伯　玄昌　甫周　道尚　入　仙貞　秀貞

御廟
玄叔　快庵　西塚　三伯　西帯

二丸廣敷泊勤方
夕七ツ時出勤翌朝四時退出
明番退出ハ来使ノ届

二月十七日 真葉板瀬尾昌玄宅へ参リ表兄ニ
會ス昌玄取扱ニテ昨日御城内杖相用之願不苦
ト御附札ヲ以テ被 仰付候趣被申 表兄ト同
道備前丁有馬宗智宅へ参リ目付松平次郎兵
衛宅ヲ尋ヌ 田村小路ナリ 田村小路へ参ル十徳
着用ル袍清川ヨリ借リシ袋杖ヲ持タセ玄関ニ
通リ御礼申置ク 帰宅 光寿真速ヲ掃ス 児
信實 立賢安石良栄ヲ携ヘ 長善寺ノ墓ヲ掃シ
祥雲寺ニ至リ ノ墓ヲ掃シ 同寺良栄父平川養
乙ノ墓ヲ掃ス 前年江戸ニ歿 書中ニ叙ス 酒半升ヲ買ヒ掛茶

座ニテ飲ム　氷川神社ヲ拝ス　信濃善光寺趣ヲ
先人先兄奠遊前ニ供シ宴ヲ開ク

表紙目付松平次郎兵衛安宅下住ハ文久元年式
鑑ニアリテ二年ニハナシ
萬延元年ニハアリ
安政六年ニハアリ御徒目付ノ年ナリ
安政六年ヨリ文久元年マデノ間ナリ

伊澤文書

四

H20
446

文久三年二月柏軒上京前

磐安儀

此度不奉存寄御上洛ニ付供ニ被仰付難有仕合ニ奉存候　且
御記ニ而御供仕候様ニ被仰付是又重〻難有仕合ニ奉
存候然ルニ当人兼而[illegible]而眩暈之気味
ニ而難儀致候ニ付素ゟ[illegible]御供　仰付候与申候も格別之
儀ニ奉存候間出し々御断ニ願奉難申出然止存候得共
先月末ゟ[illegible]月初ゟ致ニ候様ニ而[illegible]中ニ而指ゟ
難儀之若も[illegible]候ハハ小性ハ御抱之中ニ而
中眩暈之[illegible]遂ニ而難儀之人も有之候様ニ承候得
当人格別病身ニ而御座候ニ付[illegible]
勿論惣而勤[illegible]

鷗外藏書

東京大學圖書

B 23475

0004328142

迄仕ニ止漢済候得共持病ニ罷在候様急務仕候保養
折節病居起候而も必然之儀ト存候得共此人病気ニ罷在
中ニ而薬組之内ニ病気之者ニ罷出候中ニ療治致候事
難相成時亦上達ニ候後も必疲労仕候而已用有之候中
相勤候儀与覚束無存候勤時ニ而止ニ者一謹ニ而後使
ニ至為在候而且蘭科ニ而療治ニ薬品上候事故漢科
ノ者者供不仕候而用ニ而間不欠儀与存候得共
職ニ第一之備ニ漢科ニ而者供仰付候儀ト存
存候然ルニ当人儀中ニ而臣仕且漢薬等煩候而も漢
中病用勤候儀難相成も勿論又上達致候而も蘭
ニ者急速ニ而用ニ立候而相勤候儀不相成候哉素
被為供仕候とも全儀と存候且当人ニ而供被仰付

難有存候本意も不相立深存込候間右之段猿
察之上可相成儀ニ御座候得者薬科ニ而供ニ而免被仰付
候地ニ而是迄先ニ於而兼而より僕出候日限ニ出立上京致
度存候此段偏ニ奉願候

二月日

多紀永春院
津軽良春院

文久三年二、三、四、五月

清也
於玉ケ池二六様所伊俣碧安宅」

碧安與徳安書

「今廿三日宿枝御立巳時大井川無滞一統相済目
出度存候」
「当主立賢敬順安第常庵様歴中一統君御初
可之成候」
「尚於柏於国其外一同了申候」

二月廿三日

碧安　於掛川宿書

徳安江

「此発於も廿一日之附ニ追引廿三日より追引来る日限
之御出立之事何レ当月内ニハ可發程と存候」

「同着之前日川崎宿迄稲次郎ゟ罷出 於宅始末三ヶ出来
の参テモ豆花都合以テ罷出候」

三月廿四日

得意
荻野市へ

「去四月廿一日ニ大坂表ニ而為入方借致候事五月十一日ニ還御
これ以借り帰京路中 此十二日
所宜ノ為時借中ニ而返ノ これ以廿七日 参内了有之筈ニ
出ニ而還御ニ付これ以ト存候」ト右ニ出勤ニ付ハ五六日
ニ向了有之ト出…ニ之通り勝手ニ参申ト存候」

五月十四日

柏軒

家職

文久三年癸亥三月四日晩寅時大津御旅館御発駕
(中略)三條大橋御渡三條通ヨリ堂所通ヘ上リ二條
通ヨリ西ヘ御城大手御門ヨリ中御門ヘ御入リ御
玄関ヨリ御上リ(中略)石之間ヨリ上リ御医師部
屋ヘ通リ九ツ時宗碩ト交代シテ已橋石黄川通堀
川東ヘ入ル町玉屋伊兵衛持家ヘ着ク町役両人
馳走ス先居昆布ヲ出ス誥後書食畢テ先
当地之産土神下之御霊ヘ参詣(中略)小野元
満宮ヘ参詣(中略)貝川橋ヲ渡リ平野神社ヲ拝ス
ム境内桜花多ク遊看ノ男女雑沓(中略)

五日
六日快菴宗達伯元ト出水中山津守宅訪フ内
室ニテ息男後妻ニ対面(中略)
七日今日卯上刻御供揃巳中刻御出先拖墓隠岐
孝明天皇
御父御葬東召撰巳時ト申ス午ノ時御参内アリ
入御還御
八日比叡山ヘ登ル良三ヲ伴ウテ宅ヲ出(中略)実相院
様宿一泊ル
九日(中略)雨中松尾神社ヘ参ル(中略)
十日雨内命アリテ尾居大納言殿御見舞申ス申
略)御医師ニ逢ウテ御容体ヲ御一言シ御薬方ヲ拝診
シ乃菓子乃茶二汁五菜ノ御膳ヲ被下白銀十枚
ヲ被賜夏ニ登城シテ御用掛伊豆殿マテ其趣ヲ
申上ル今夜宿番
十一日雨賀茂下上之社ニ行キアリ将軍家供
奉
十二日
十三日下賀茂御祖大神宮ヘ参ル(中略)上賀
茂別雷大神宮ヘ参ル(中略)門ノ前ノ堺屋ニテ
酒ヲ飲ム(中略)
十四日当番
十五日玄叔ヲ率テ先大仏ヲ観(中略)稲荷社
ニ参詣ス(中略)社ノ門ノ前石川屋ニテ酒ヲ飲

十六日愛宕参り（中略）
十七日先考正忌日精進終日梅宿ニ居ル
十八日
十九日
二十日
廿九日石清水八幡宮ニ参リ拝ム（中略）
卅日雨
卯月朔雨新日吉神社佐女牛八幡宮両所ヘ
参ル（中略）
二日寅日朝雨昼ヨリ晴ル大樹公巳刻御参
内ナリ御供梅五ツ半時其サシク前伯元ホト御
先・梅薬院（御入ニテ午ノ半刻頃二タ綾ノ御直
衣ニテ御参内ノ儀キ一橋中納言殿モ御参内アリ
御答衣アリテ主上時ノ宮前関白殿関白殿大樹
公ヱ御盃（ハ吸物五種御肴七種醍醐ノ公卿ハ
吸物三種肴五種ナリトリ大樹公（ハ天盃ヲ賜リ
御馬ヲ賜ル而天盃公ニハ柳筥松ヲ着ケ松ニ蝋燭
ヲ挂ケ御成ノ半刻頃御退出ニテ亥刻前梅
薬院ヲ御出立チ伯元ホト亥刻ニ梅宿ヘ帰ル（中
略）
三日卯日天晴レ風立レ盧山寺ノ元ニ大師御画ヘ参ル
（下略）

神道録抄

松軒

文久三年カ

二月廿七日大樹公発岡崎。随行宿于宮駅。詣熱田大
神宮ハ劒宮。
廿八日発宮駅。舟渡佐屋川。至桑名。入伊勢国也。
三月。
四月二日。
四月三日。道ハ吾国ノ心ヲ本トシ孔子釈迦ヲ末トス可讀
書ハ孝経論語、次ハ詩書易春秋礼記、次ハ老子、荘子
ハ用心シテ讀ムベシ諸子百家ハ泥ムベカラズ
四月十七日。善神悪神ノ事。

柏軒與棠軒

文久三年四月七日

手紙披見不勝大悦候。去月十八日出立之承知、其後廿二日出立之承知、其日數ヨリ長頸相違、必欲一良見候。數大津迄人遣候。必一見。既ニ今日當番繰合昨夜相勤置程ニ相見渴望。從是僕直ニ伏見迄參候。路費乏少困入察候得共、何如樣共可致、誰カ少病氣ト稱シ枉テ今夜着伏見ニ滯留可被致存候。イロ／＼差支アリアレトモ心中動氣致筆マワラス、イツレ面上目出度可申、以上。

四月七日　磐安

春安殿

10
高知堂製

柳軒遺書

文久三年癸亥七月七日病中作臥書ス吾ハ御國魂ヲ主トス若吾身終ハ冥ニ吾ヲ祭ル時ハ先第一古事記ヲ讀メ次ニ孝經論語ヲ讀誦セヨ是ハ冥ニ吾ヲ祭ル時ノ事也 其餘ハ今ノ俗ニ随テ七七日月忌年忌ニ僧ヲ請佛典ヲ讀ハ不可廢次ニ忌日吾ヲ祭ル時ハ孝經第一次ニ論語 忌日廣ク吾ヲ祭ランコト思ハヽ内經素問内經霊樞次ニ難經沌甲乙經第三ハ通俗ニ随テ請僧誦佛經是ハ大過ナルヘカラス但所好ハ普門品也是ハ

吾平生所知千巻ノ経ヲ讀誦スルモ生前ニ不知ハ馬ノ耳ニ風也普門品ノ次ハ佛祖三経也

高知堂製

文久三年七月

柏軒病状

十五日後「小腹ハ硬満」時々痛ニ下二句不足位之夜分有之尤竹筒ヲ以用ル程之ハ通ニ無之如何服紗ニテこすり取
中ヨリ腹気更ニ不被為在水穀之渇少々ク除テ気上
リ而已

十七日朝「翌晩迄二句不足之ハ通シ十二度有之其間多分ハ昏睡」

十八日「ハ病労ニ募、始終ハ昏睡ハ小水ハ通シ日之内六度夜ニ入七度ニ及候」「七半時頃ヨリハ呼吸ハ短促ニ相成」「卯之上刻ヨリ危篤ニ相成」

七月十九日

多峯安策

湖南正路

柴田常庵様
杉田敬順様

西田玄同
塩田良三
志村元叔

柏軒葬儀

三十日卽病牀之儘ニ仕置御召ハ官服御袴御寸法通リ
帯共晒布ニテ仕立ノ肌付ノ帷子ハ新キ御右合御召ノ
沐浴ノ時仕
一ト先亭舎五條下ル處曹洞派禅院宗仙寺ヘ御柩ヲ移
サ上ル」
柩ハ二重ニ仕立ノ駕籠ニテ宗仙寺ヘ御送リ申上ル」
徳安様ノ着之上ノ火葬可仕得ニテ剃髪ハ藤
四郎ヘ申付候」
右十九日　五名（署）　両大兄（宛）

文質彬々行亦全。有忠有信好稱賢。官晋法眼緒

簡業。得春君無等肩。
茲惟新捐館文行院忠信居士。真機卓爾。本体如然。（中
照）叫這裡非真非假。木人夜半拍手舞。非凡非聖。石
女天明和曲唱。正與麼時。帰家穩坐底作麼生。
露。普陀山上點如月。我信清流共谷解。」
△形藏宗仙。我題其語（中照）

（甲）生也從因。五十四年前在武陵。体得医家之業。与病者俱見愈果。
死也從縁。五十四年後在洛陽。帰入四弁禅。

（乙）真源。其文行也。文彩縦横。行解相応。其忠信也。忠実発達。信厚耀
焉。或時看読佛祖三経等。具無隣無似佛祖行李之眼。或時諸
誦観音普門品。得無相田函観音妙智之力。

伊澤良子談

津山碧山室、碧山小嶋成斎

○柏軒 ― 磐（徳安） ― 長・良・徳

父（良） 大正五年六十一歳

○清川安策ノ裔ハ大津ニアリ

○増註職原鈔廃名異名抜書一巻アリ伊澤文庫
ノ印アリいろは分ナリ

○蔡図アリ、「従五位上視部成節」ト四署セリ

○蓮性院禅尼公御詞アリ

○俊子書状一通アリ

○蘭軒妻ノ書状一通アリ満安ト署ス
○後子楷書蒙求一巻アリ 伊澤 信實 ノ印アリ
○名はかりを楽む年そ女郎花
均清（真野）
○わき出てへたてぬ中の澤水に千代もすむへき
たつのともろ声 元亮
右石川貞伯が良子ノ婚礼ヲ祝セシ歌ナリ
○榛軒ノ詩
笑迎四十六年春。椒酒三杯氣愈伸。余有惆兮

児有孝。奉斯懶病不材人。
己酉元日口占　源信厚
右榛軒詩存ニ載セズ
○陸秋實長崎ニテ蘭軒ノ詩ニ次韻ス
○七十四翁侶仙立之ノ自署アリ
○松田道夫本郷湯嶋三組町八十四
○志村良愷南豊嶋郡千駄ケ谷村旧原宿町六
十六等勲向ノ吏ナリ
○柏軒ノ子孫祐弦時ノ諸用留アリ

右

柏子誓書

誓約之覚

巴流長刀目録御伝授之儀聊他見他言仕間敷候事

御相伝相済候上者師指南之儀ニ堅相守稽古半ニ而相止申間敷且他流与芸替不仕候右於相背者

秋葉大権現摩利支天別而鬼神之御罰可相蒙可申者也仍誓約如件

嘉永四年歳次辛亥十一月　伊澤柏

喜多村増馬殿

枳園與蘭軒孫女

代名

今般知之母帰郷ニ付一筆さし上申候。先ハ皆様方壮健御めて度存上候。此方無事、伊澤磐様其外皆御勉強にて喜居候。徳様も此節ハ西洋へもロウ入学のよしニ而居候。いつれ流行とやらねは損にて居り間、被成るがよろしく候。決してご案じ被成間敷候。安石様も此間御出ニて居ます。しもたやにて御暮しの様子、〇があると見えて南山しく存し候。とふか来年御出京にも相成候よし御待申上候。お陽より御文あけ可申よ

高知堂製

れもこれ八年中廿日はしかり且急に舟が出るとの
事ニ而候間、私より一寸御機嫌と伺候まで也。口津
山へよろしく御序に願上候。

七月十二日　　表立之

伊澤拐介兄様

印

神田区元岩井町
廿五番地　表民

高知堂製

丙寅三次集　慶応二年

芋二庵主人稿
棠軒三十四歳

七絶和歌

明治甲戌集　七年　○

罕夫主人稿

父君の二十三年忌に
はなちあまりみとせ経ぬれと今も猶さながら見
ゆる父の面影

詩ナシ

棠 蘭軒女長

謹啓仕候未ハ之段愚書差上申候如早速御返事
くだされ御懐父蘭軒先生以下ノ思召承知了
せし候甚以長子卯ノ津山碧山墓ある御方ゟ現在
お存しも右碧山先生ハ文ノ人ハ紀文ニ相成し現在
ニ交際り申し候近来ハ御無沙汰致し居候
福山ニ参り帰り申せし候弟お尋申上候
今どき書面まゐり山ハお尋よろしく長子ハ福山
同年三月ニおり候福山ゟ来り津山道路
其母上お同居被遊候も上ニ御座候
常城ニ住り申家思召様思召
之丈々知居ら候事又此外先生も相し候

駿州藩用人支配

伊澤盤安

家族四人

右者相州餘綾郡山下村百姓仙次郎方ニ
一ト先預り置度段申出候間願之通御
許容被下置候様仕度此段奉願候以
上

明治元辰年十二月

公務人

駿藩御
留守居

辨官
事記

之乱筆御推讀申上候也
なりけて
横山謹言

森林太郎先生
玉案下

九

公用誌　　　　　　伊澤徳安

靜岡縣貫属士族
家禄現米十八斗
靜岡第十六区百姓安右衛門方同居
明治五年七月東京第一大区十一小区東松下町　伊澤徳安（改名安又）改名[illegible]
三十七番地工部省七月出仕
塩田眞方寄留
改名[illegible]明治五年四月[illegible]出

嘉永二年四月九日生

文政四（八）年六月十九日生　母　春（ハル）
右ハ東京平民[illegible]吾三右衛門叔母也

嘉永五年五月十九日生　妹　安

氏神　静岡宮ケ崎町浅間社
寺　東京浅草長善寺
同　駿州阿部郡大在家村玉徳院
並曹洞宗

明治六年三月二日東京南紺屋町佐原勘兵衛宅
ヲ発足ス学術脩行中寄留ノ家ナリ
五日静岡着
九日東京第二大区十五小区麻布南日下窪町医師伊沢
信崇方ヘ寄留ノ事ヲ願フ　留守心得ハ
静岡呉服町一丁目多喜後家
ひさ方
比留正方

十三日静岡発富士郡前田村ニ宿ス加藤要蔵方ナ
リ
十四日前田村発三嶋駅世古六太夫方ニ宿ス
十五日三嶋発小田原宿三河屋ニ宿ル
十六日小田原発但母妹ノ二人小田原ニ留ル藤沢宿
桐生屋ニ宿ス
十七日藤沢発鳥居坂本家ニ着ス
二十二日第一大区十一小区扱所ニ家族共塩田真方ニ寄留
スルコトヲ願フ
二十四日電信寮自費修行ヲ塩田ニ托ス
二十八日仙次郎小田原ヨリ母及妹ヲ送リ来ル
四月一日第三中ノ鳥居坂本家信崇ノ養子トナル名サ

信平ト改ム明治六年十三年十月
四月三日全家麻布南日ヶ窪町町医師伊澤信
崇方ヘ寄留すとの届を小区扱所ニ出ス
十一月二十七日第一大区十小区南八丁堀一丁目五番地司
法省中解部松田道夫方ヘ寄留替ヲナス
明治七年八月十日第一大区十四小区小網町四丁目五番地
借店ニ寄留替ヲナス

悼信恬居士
高声の耳にのこるや初鰹
己丑初夏日　贈孝子良安詞伯　春樹拝

○

歌　はる道

○

小石川区西青柳町四番地　伊澤様
神田区五軒町二十　井上直樹

○

正宗院へ手向侍りて

あらかやの土あたゝか ー 冬籠

七十五翁 陶後園九拝

○

千住驛別諸君並信順弟 信情拝草

右留別也。去歳相逢今歳離トアリ。又浮萍时节ト

アリ

田中医徳院ナリト箋上ニ記ス

○

洗粉 菊の露 石川氏家傳 駒込片町 彭寿堂 藤屋宗吉

洗粉 艶雪 ○ 仙桜会 伊澤製 道庵ト朱書アリ

彭祖漬 重教拝

長安梳 ○

艶雪 附書 道盛

徳橋 ○

近火見舞礼状ニ近間公柘本借候と云々

四月吉日

道盛

めく山様

伊澤道盛

上書

○

明治三十五年カ（消印）

昨日飯田町本宅男子御出生ノ由

二月二十三日

印

東京市京橋区南鍋町一丁目七番地
ドクトル伊澤信平歯科治術所
電話新橋一二四五

伊澤磐

高知堂製

北豊嶋郡巣鴨監獄署官舎第二号

伊澤徳様

生シシ子ハ信匡ニ

○

明治十五年（消印）

家作之事見合セ云々母病氣云々

二月三日

本郷弓町一丁目廿五番地

岡寛斎

神田区猿楽町八番地

伊澤お嘉江様

○

小嶋成斎
書画追善会　五月廿五日於両国井生村楼
「先師ノ書数幅ヲ展シ又書籍墨帖等手沢ノ存スル
モノヲ集メテ之ヲ陳列シ且ツ碑文五十葉ヲ摺写シ抽
籤ノ法ヲ以テ之ヲ諸君ニ呈シ」云々
会主　門人観海小此木包之誓
幹事仝　復軒内田義備
信山竹内精三
補助　大沼枕山　石川鴻斎　瀧和亭
服部波山　金井梧楼　日下部鳴鶴

10
高知堂製

奥原晴湖　飯嶋光峨　夜雪庵金羅
高橋泥舟　高木聾穎　松栄堂
温恭堂　扇明亭　文魁堂
席亭　芝廣町廿七番地賀来々
小紫カ

○

「非貫非農非佛儒。箕裘売薬住通衢。有
人若問施治術。笑指壁間医聖図。偶成。
右今村了庵也
了庵。」

○

明治二十五年柳軒三十回忌会於出雲寺　○

夏山にあふ阿羅漢の誓哉　東里

ほとけしれ梅の香や此の庭　柳軒門人井上直對

石果安　○　詩あり築と署す

塩田真　○　署曰塩田温楓軒

引首印（楓苑）

塩田温印

一字（蕤）

上原半一（金八郎父也）書　○

「蒙聞衆薬做医事。周政方今占見莫。多謝藉
君済世恵。無誇蘇治銭千人。眷因于味攻因気。
死此治邦文武呆。赧愧吾侵甘伯名。功勲輸
与歸康伯。右嘉有志諸君有依菜之廓。
賤此代謝。　院長閣内帷幕揮筆」

重陽宴詠草　○

酉子南方　瀧子　山嵌進　秋芳

引着印之　光風霽月

牛込区市ケ谷富久町百六　〇　下谷区上野桜木町二

伊澤徳様　塩田真

大正三年一月十二日（消印）

一

四谷区大番町二七　下谷区仲徒町四丁目三二

伊澤徳様　塩田真

明治十二年十月二十八日カ

高知堂製

一

本郷区駒込西片町十番ろノ四号　印

東京市下谷区上根岸町
伊沢徳殿（）方
大槻文彦

伊澤徳殿

明治三十一年九月十日（大槻印）

一

北豊嶋郡巣鴨町上駒込二八　清国天津日租界老猫

伊澤修殿　米廠　塩田真

明治甲辰一月五日　三十七年（根）

一

北豊嶋郡巣鴨村監獄役所第二号

上根岸
大槻

伊澤徳殿

明治三十三年八月十六日

牛込区市ヶ谷富久町一百五

伊澤徳様

東京下谷区根岸
御行の松の西
大槻文彦

明治四十二年一月五日

明治四十三年一月四日、同八月十四日

本郷弓町一丁目廿五番地内藤方内

伊澤様

下谷金杉村二百十六番地
大槻文彦

来月一日（十二月）ハ漏安侍殿出々○来月十日前ニ見候
二伯壱へ出立ニ付其前ニ御面会相成度候

十二月廿八日

座ノ字ヲ通スヘ文　花母文彦ヨリ宜シク

二月廿二日

伊澤ノ隠居様 ○

大槻伊世子

吉田洞吾畫

「元是人間無用人。空過八十歳秋春。残生適ト茅廬地。墨水下流漁父隣。 深川隠居題」

竿 〔龍鱗隠士〕」

右前増上寺大僧正福田行誡翁ト註シアリ

○

京橋区采女町清河之遣様 芝二本榎町一丁目十八番地 新井日薩

明治十九年七月廿日（消印）「御許容被成下」云々 右池上本門寺主ナリ

高知堂製

津山碧山

七絶「送伊澤母居帰東京」

同家女子和歌 長子 清子

○

明治十四年十二月六日（消印）

神田区猿楽町一丁目六番地 初音町四番地

同日新町内 伊澤徳様 峰嶋敬奴

「御婦様ハ不快」云々 「御母上様にもお転住」云々

○

「蓋闕雖時道不同。如今何角雌将雄。雪窓

溫酒説医理。理在皚々皎々中。　右二月十一日偶

不可感。陰海陳人。」

○

「誰拾泥蜆品海隈。鮮々肥肉味佳哉。諸君恵与堪

多謝。月下花前助酒杯。　東儀俵井伊澤諸君見

恵品海産泥蜆。賦一絶以唱謝。　榛庵半士操」

○

明治三十五年六月二十日

「昨十九日侍医局勤務拝診御用掛

被仰付候」　住宅

麻布飯倉片町

伊澤信平

高知堂製

松園與徳

明治十五年十二月（消印ニヨル）

京橋区采女町十五番地

清川玄道様御内

伊澤徳様

印　京橋区八丁堀水谷町九番地

○

稽古いたし候間御出可被成候

三月廿九日

岡本友之助

伊澤平安殿

追悼伊澤棠軒君　○　七絶　三好統安

伊澤令堂一周忌　○　七絶　松軒藤田其

奉送伊澤君従軍従軍之奥州　○　七絶　豊田亮

前年来東京大人○小生ニ○前ゟ上坂仰○尊君其問ゟ出京ナやニ森

君ヨリ仰承○飯田、石川、三好ニも諭ス

二月廿一日

清川玄道

高知堂製

伊澤徳様

一

尊大君事　棠軒　十一月十日夜半より御発病（中略）同月

廿七日遂ニ御遠去行之趣（中略）ゟ愁傷之程奉恐察候

三郎君にも十月四日痢病にて御遠行之由重々之御

愁傷紙上何悔難尽儀ニ被存候、母堂君久々御不

快之趣（中略）折角御保摂奉祷候（中略）手前方に

ても八月十七日長女を忌病既（中略）虚労病にて遂

下泉致し愁寂在候（中略）御程御捜候得は、しかとし

段及旧門下之仁にも（中略）御為知申上候事ニ候御笑

(中略)養母始宮崎婦共も屋敷中上候様申出候(下略)

十二月五日認　清川玄道

伊澤信様

右明治八年也

○

寿城　宝暦三癸酉正月三日生　巳年八十一歳

○

「七藪自養

花の下に嘗聞て初鰹　榕園上

高知堂製

○

病死御届

第二大区深津郡小二十二区吉津村三百二十七番地

士族　伊澤棠軒

右之者十二月十七日病死仕候　七此段御届奉申上候以上

右長男　伊澤徳

明治八年十二月

小田縣参事益田包義殿

｜

家督相續ハ願

第二大区深津村郡小廿二区吉津村三百二十七番地

土佐藩伊澤崇軒亡後男

伊澤德

右者先般ゟ御仕成所通崇軒病死仕候ニ付跡相續之儀者

常面之者ニ被仰付候而下度奉願候以上

明治八年十一月

伊澤德母　かよ

小田輕判事㠶田包義殿

○

磐安様

西三日中ニ御出願度

梟春院（多紀）

節分日

高知堂製

臥病詠懐　長歌並反歌二首　夏蔭

「あらたまの年のはたちを幸はへもとめめ

なからしと云々

○

「雲照大德におくる

雲照す真如の月も光散　沙弥空阿」磐之

○

劉古甫詩稿

劉道夫席上云々

劉君觀亭于尋云々

館機、樞卿號柳灣越後新潟人天保丙申時年七十又五

柳灣漁唱詩第三集中之拔萃

伊澤朴甫宅尚齒會

故友伊澤蘭軒嘗擬招親交中高年者設尚齒之宴未果而歿狩谷棭齋在其數中而亦尋物故矣今茲天保丙申秋九月十日賢嗣朴甫設宴招集蓋終其先志也余亦與之座間賦一律似朴甫

及掖齋後人少卿

雨晴楓葉菊花天招集高堂開綺莚尚齒
漫誇頭似雪延齡共酌酒如泉延齡備州酒名是日席上侑之
新詩吟就徒爲爾舊事談來已惘然不見
當時盧與狄衰顏慚對兩青年盧狄謂蘭畊掖齋二人皆少於余十數歲

近藤俊吾

高橋製